るろうに剣心～明治剣客浪漫譚～　明治の剣士と魔法少女の物語

人斬り納刀斎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
るろうに剣心～明治剣客浪漫譚～　明治の剣士と魔法少女の物語

【Ｎコード】
Ｎ１３００Ｗ

【作者名】
人斬り納刀斎

【あらすじ】
かつての大乱から早四年がたち、時代が平和の様相を見せ始めるようになった日本。
そんな日本の王都「京都」に、一つの奇妙な店「なんでも屋・飛天」があった。
この店が紡ぎ出すのは、一人ひとりに必ずある「浪漫譚」。やがて浪漫譚は他世界の運命さえも変えていく。
作者はただのるろ剣バカです。よってリリなのの設定だのなんだのが無視されてるところもあるので御注意を。

プロローグ（前書き）

どーも、納刀斎です。
気を取り直して、もう一本小説を作ってみました。
ほんとにほんとに僕は「ただのるろ剣バカ」です。性懲りもなくるろ剣ばっか。
やっぱりるろ剣は今世紀最高の漫画ってことで。
僕も頑張りますんで、宜しくお願いします。まずはプロローグです。
短いですけどこのくらいがプロローグとしては妥当だと思います。

プロローグ

王城・江戸城が勝海舟、西郷隆盛の会談によって無血開城され、維新政府が成り立ち、偽りの四民平等が訪れた。
流血沙汰や死闘乱闘もなくなり、優しく温かい家庭で子供が育つことができるような時代になって早四年。
「千年王城」と呼ばれ、日本の首都として長く繁栄した京都の町。
此処に、ひどく賑やかな店が一つ。
『なんでも屋・飛天』と書かれた看板を掲げたその店は二年ほど前からこの地で営業を始めた、文字通りの『なんでも屋』である。
店員は七人。
かつては最強無比の伝説になった程の凄腕の剣客で不殺を誓った『人斬り抜刀斎』こと『緋村剣心』。
偽官軍の汚名を着せられ、非業の最期を遂げた草莽隊『赤報隊』の元準隊士『相楽左之助』。
壬生の狼と呼ばれた幕府方最強の剣客集団『新撰組』の元三番隊組長『斎藤一』。
王城江戸城を影で護り、戦うことなく最期を遂げた『隠密御庭番衆』最後の御頭『四乃森蒼紫』。
『人斬り抜刀斎』の後継者としてまた人斬りを行った維新志士『志々雄真実』。
天性の剣才を持ちながらも幼いころに養父母より虐待を受け、「楽」以外の感情を封印してしまった少年剣士『瀬田宗次郎』。
凄腕の鍛冶屋で、少年時代の記憶がない天才槍使い『猿飛ユーノ』。
平均年齢は１９・６歳。そのくせ警察の全勢力を持ってしても及ばないほどの戦闘力を持つおかしな集団だ。
この七人を縦糸に、時代の流れと数奇な運命を横糸に、浪漫譚は京都下町から幕を開ける―。

プロローグ（後書き）

しょっぱなから伏線張ってみました。なんでユーノがいるのさ？という質問にはそのうちお答えしますんで、まずは落ち着いて読んでください。

キャラクター設定（前書き）

誤解や疑問をなくすためにやってみました。
これでみんなが誤解や疑問をなくしてくれたらいいな。

キャラクター設定

緋村剣心（ｃｖ：涼風真代）
年齢：１９歳
身長：１６８？
武器：逆刃刀
今作品の主人公１。戦国時代を端に発する一対多数の斬り合いを得意とする古流剣術「飛天御剣流」を受け継ぐ剣客。
幕末の京都に於いては「人斬り抜刀斎」の異名を持つほどの剣客であったが、戊辰戦争の折に剣を捨てた。その際に刀工新井赤空から「逆刃刀」を譲り受ける。以来、「不殺」の信念を持って人を斬ることなく誰かの幸せを護る術を模索している。口癖は「おろ」。
五年前に喧嘩別れした双子の兄がいる。

相楽左之助（ｃｖ：うえだゆうじ）
年齢：１９歳
身長：１７５ｃｍ
武器：斬馬刀
今作品の主人公２。草莽隊「赤報隊」の元準隊士。隊が壊滅してからは喧嘩屋として日々喧嘩をしながら全てを忘れようとしていたが、或る時剣心と戦い、目の前を見つめて生きることを決意する。
剛力の持ち主で、大の大人をデコピン一発で吹き飛ばすことができる。
斎藤とは仲が悪く、ユーノ曰く「犬猿の仲に見えるけど実は虎と狼が喧嘩してる」らしい。

斎藤一（ｃｖ：鈴置洋孝）
年齢：２４歳
身長：１８５ｃｍ

武器：無銘の日本刀
今作品の主人公３。幕府方最強の剣客集団「新撰組」の元三番隊組長。「左片手一本刺突」を絶対の必殺技にまで極めた左手一本突き「牙突」を操る。
性格はいたって冷徹で孤高の一匹狼。誰に対しても突っぱねた態度をとる。心の奥には優しさも持ち合わせている。目下の者に対する面倒見が良かったりする。
弥彦から「殺人鬼みたいな目つき」と称されるほど目つきが鋭い。口癖は「阿呆が」。髪型はオールバック。

四乃森蒼紫（ｃｖ：安原義人）
年齢：２２歳
身長：１８３ｃｍ
武器：小太刀二刀
今作品の主人公４。江戸城隠密御庭番衆の最後の御頭。
先代御頭のみが使えたという「隠密御庭番式小太刀二刀流」をたったひとりで体得したほどの天才。
徹底的な現実主義者。何事に於いても動揺することなく正確な情報のみを求めるため周囲から「冷たい」などと称されるが、本来は情熱家。
仲間思い故に無茶をすることもしばしば。

志々雄真実（ｃｖ：池田政典）
年齢：１９歳
身長：１７４ｃｍ
武器：無限刃
今作品の主人公５。人斬り抜刀斎の後継者。
剣の腕も頭の回転も剣心並みだが、あまりにも重要な人物を暗殺してしまったために新政府に殺されかけたところを剣心に助けられる。
その時の絶望で髪は真っ白になってしまっている。

新井赤空最終型殺人奇剣「無限刃」を振るい、火炎を操る。
宗次郎が唯一感情をさらけ出す人物でもある。カリスマ性は抜群。
志々雄自身は剣心を尊敬している。
ユーノと仲がいい。ふたりで行動することが多い。

瀬田宗次郎（ｃｖ：日高のり子）
年齢：１８歳
身長：１６７ｃｍ
武器：長曾根虎徹
今作品の主人公６。「天剣」と称される。
八歳のころに養父母より虐待を受け、知らず知らずのうちに「楽」以外の感情を封印してしまった。
天賦の才の剣才を持っており、また超神速の移動術「縮地」を操る。
飛天の店員では一番年下。そのため結構可愛がられている。
いっつもニコニコ笑っている。

猿飛ユーノ（ｃｖ：日野聡）
年齢：１９歳
身長：１７６ｃｍ
武器：天牙槍
今作品の主人公７。鍛冶屋で槍使いの青年。
維新動乱のさなか倒れているところを鍛冶屋「猿飛鎌人」に拾われ、親子として暮らす。いまでは京都一の鍛冶屋として有名。
戦闘おたくで、常に強い相手を求めている。戦場には必ず出る程の戦闘狂なので、斎藤から「バカ」と言われている。

雪代縁（ｃｖ：佐々木望）
年齢：１９歳
身長：１８３ｃｍ
武器：倭刀

今作品の主人公８。
剣心の従弟。剣心の力になりたいと思い、上海に渡り大陸で極められた新剣術「倭刀術」を身につけて帰国する。
剣心とは仲が良く、互いに心を許し合っている。
剣心の双子の兄の行方を知る唯一の人物。

キャラクター設定（後書き）

こんなもんですかね。縁は「復讐」というテーマが消え去ってしまったので説明が短いですが。
声優イメージについてですが、学校の友達にいちいちアンケートとった結果です。僕自身もキャラによく合っていると思い、満足しています。
次回から本編に入ります。

第一閃：飛天の如く（前書き）

任務開始です。
時空管理局から直々に依頼が来ます。それに剣心たちはどう対応するのか、お楽しみに。
感想待ってま～す

第一閃：飛天の如く

飛天は今日も穏やかだ。
ユーノは工房に出ていて今はいないが、それ以外の全員はゆっくりお茶なんか飲んでまったりしている。
誰も知る由はなかった、今日この日が自分たちの運命の歯車が廻り始める日であるなどとは。

「失礼します、緋村剣心さんは御在宅でしょうか」
扉打もせずに入ってきたのは、黒髪の少年だった。
「緋村剣心は拙者にござる。童、何用でござるかな？」
剣心が応対に出た。少年は頭を下げると、こう切り出してきた。
「お願いがあります」
「？」
とにかく中に入れ、剣心に勧められ、少年はとりあえず飛天の中に入った。
ソワソワと落ち着かない感じの少年。そりゃそうだろう。全員帯刀、おまけにあからさまな殺気を放ってくる狼が部屋の隅っこにいるのだから。
「用件は何でェ？いや、そもそもお前は誰なんでえ？」
左之助が少年をにらむ。少年は背筋を伸ばすと、名乗った。
「僕は時空管理局の執務官、クロノ・ハラオウンです」
「あァ？悟空浣腸局？」
「左之助、時空管理局な」
ハナっから間違えた左之助の言葉を訂正する志々雄。もうこの光景も慣れっこだ。
「クロノ殿。用件は何でござる？聞かぬ事には始まらない」
「用件というのは・・・ほかでもない、最近活発化してきた『犯罪組織：覇軍』のことなんです」

「覇軍というとあの組織でござるな。それがどうかしたのでござるか？」
「・・・あの組織は、もうこの一月で三桁の世界をつぶして自分の配下に加えています。僕たちの本拠地も潰され、皆殺しにされました」
手が震えている。クロノは話を進めるにつれて顔色が悪くなっていく。辛い思い出を思い出すだけでも苦しいのだろう。それでも彼は頑張って続けた。
「辛うじて僕たち少数は生き残りましたが・・・圧倒的に戦力が足りないんです。此処はなんでも屋だと聞いたので・・・」
「俺たちは戦争請け負い屋じゃねェぜ。勘違いするなよボウズ」
斎藤がタバコをふかしながらガンを飛ばす。
「お願いします・・・貴方達の力が必要なんです！・・・・緋村さん、貴方を『人斬り抜刀斎』と知っての頼みなんです」
その単語に皆が驚愕する。抜刀斎のことを知るのは新政府の、それも一部の人間だけだ。この少年は何処でそれを知ったのだろう？
「・・・」
剣心は黙ったままだ。何かを考えているようだが、その真意は分からない。

「あのガキ、『抜刀斎』の事をどこで知ったんでェ？」
「それは分からぬよ」
「どちらにしろ、このまま放っておく訳にもいくまい。どうするかを決めなきゃなんねェからな」
皆が黙る。ひとまずはシンキングタイムだ。
「一応は協力しておいてやった方がいいんじゃねえか？このボウズ、嘘言ってるようには思えなかった」
志々雄が気絶しているクロノを見てつぶやく。あの後クロノはばったりと気絶してしまった。何処から来たかもわからないから、とりあえず長椅子の上に寝かせておいてやった。

「まあな。けど得体が知れねえぜ。無闇に首を突っ込むのもどうかと思うけどな」
左之助のもっともな意見に、皆が頷きかけたところだった。
「皆はそれで良いのでござるか？」
剣心が異を唱えた。
「この少年は家族を殺されたかもしれない。仲間を、親友を殺されたかもしれない。拙者はそれを黙って見過ごすわけにはいかぬ。拙者だけであろうとも、この少年を見放すわけにはいかぬ」
「同感だな」
蒼紫も同意を唱えた。
「俺かて怪しいと思っていないわけではない。しかし、これ以上無駄な犠牲を増やす必要はないと思うが」
「フン。相変わらず甘い野郎だぜ。・・・まあ、俺は傍観しているより覇軍をつぶす方が性に合っていそうだ」
蒼紫に続き斎藤も協力の意を示した。
「・・・そうだな、そうだよな」
「協力してやろうじゃねえか、時空なんちゃら局によ」
「これ以上、犠牲は増やさない。ですよね、緋村さん」
「決まりでござるな。拙者ら『飛天』は、全力を以て時空管理局を支援する！！」
かくして『飛天』は、久しぶりの依頼についたのだった。

第一閃：飛天の如く（後書き）

短え。
時間がないんですよね。
次は長いです。ユーノや縁、弥彦といったキャラを出さないといけませんから。
それでは！

第二閃：出立の日って色々ゴタゴタするのが常（前書き）

題名が銀〇っぽいですが気にせずに。
駄文ですが、これを踏み台に研ぎ澄ましていきますので、どうかお付き合いください。
すみません、弥彦は出せませんでした。
狼の名前はそのうち明かします。
ではどうぞ。

第二閃：出立の日って色々ゴタゴタするのが常

翌日―。
「あれ・・・あれれ・・・」
小鳥の囀りに目を覚ましたクロノが飛び起きる。
「起きたか。随分と眠り込んでいたぞ」
窓際で手を組んでいた蒼紫が声をかける。
「随分って・・・どのくらい？」
「ざっと十八時間だな。話し終えてすぐに気を失ってな」
「そうですか・・・」
俯いたクロノはあることに気付いた。あの狼が足元にいる。
「あれ・・・この狼、僕の事警戒してたのに」
「こいつはもともと番犬の役割だ。客が敵か味方かわかるまではいつもあんな感じだ」
起きろ、と蒼紫が狼を撫でると、狼はすぐに起きた。
「クロノといったな。皆が戻ってくるまでまだ時間がある。―隠密の本質は徹底的な現実主義。まずはお前ら時空管理局のことと覇軍の様子を詳しく話せ」

ユーノの家、『猿飛刀工』にて。
飛天のメンバーが蒼紫以外全員揃っていた。目的は『刀を鍛え直してもらう』である。ユーノには昨日の真夜中からぶっ続けで刀を打ってもらっている。
「そろそろぶっ倒れるころじゃないか？大丈夫か？」
「ユーノはそんなタマじゃねえさ」
他愛のない話で暇つぶしをしていると。
「終わったよ」
ユーノが刀を両手いっぱいに持って出てきた。
「なるべく強くしといたから。一気に何人斬れるかは分かんないけ

どね」
「済まんでござる」
「いやいやそんなことないさ。刀を打ってる間は時間なんて忘れちゃうからさ。それに睡眠は取らなくても大丈夫」
ユーノはニコニコと笑みを崩さない。
「それよか出立はいつだっけ？今日じゃなかった？」
「今夜八時だ。遠かろうが近かろうがあのガキが大阪から来たことは明らかだからな」
クロノはぶっ倒れる直前に、「大阪湾で仲間が待ってる」とつぶやいた。
「へえ。じゃあまだ時間があるってことか。ならひと眠りくらいはしとこうかな」
「その方がいいんじゃねえか。いざって時に力が出ねえんじゃ話にもなんねえからな」
志々雄の言葉もあって、ユーノは工房に引っ込んだ。
「後は縁の所に行くだけだ。抜刀斎、行って来い」
「ハア・・・分かったでござる」
全く人使いの荒い、と呟いて、剣心は京都の町に消えていった。
「俺は馬車を予約してくる」
「ああ、頼んだ」
斎藤もまた消えていった。残された三人は、さてどうしようかと考え始めた。

『雪代』と掲げられた一軒家。その前に剣心は居た。
「失礼。巴、居るか？」
「心太？どうしたの？」
扉打をし、声をかけると従姉の巴が出てきた。
「ああ、すまない。縁は居るか？」
「縁？居るけど、何かあったの？」
「一騒動ありそうでな、縁の力を借りたい」

「そう。一縁、心太が来てる」
巴は奥に一声かけた。ややあって、巴の弟、縁が出てきた。
「兄サン？一体どうしたんダ？」
「縁、ちょっといいか。『飛天』まで来てくれ。倭刀も持ってきてくれ」
「ああ、分かった。その様子だと、何かあるんだナ？」
「察しがいいな。その通りだ。『飛天』で待ってるから、なるべく早く来てくれ」
剣心は去って行った。残された縁と巴はその背中を見ていた。
「一騒動あるみたいよ。なるべく早く行ってあげて」
「分かってる。・・・兄サン、わざわざ俺を呼んだのは訳があるのか？」
「分からないわ、けど今は行動するのが先」

『飛天』に戻った剣心は、クロノに声をかけた。
「クロノ殿。調子は如何様でござる？」
「緋村さん。おかげさまで、だいぶ良くなりました」
「左様でござるか。それはよかった。それはそうと、今夜八時に大阪に出立するでござる。準備をしておいてくれ」

斎藤は馬車の予約を済ませると、誰もいない自宅に歩を進めた。
「・・・こいつを使うのは、久方ぶりだな」
彼は母屋の棚の上の刀に手をかけ、鯉口と鍔を縛り付けてある紐を引きちぎった。そして状態を確かめるために鯉口を切ってみる。銀色の光が一閃する。
「・・・鬼神丸国重。今一度、お前の出番だ」
愛刀、『鬼神丸国重』を革帯に提げ、斎藤は自宅を後にした。

夜八時。
剣心以下、左之助、斎藤、蒼紫、志々雄、宗次郎、ユーノ、縁、ク

ロノの九人は馬車に揺られていた。
大阪までの道のりは長く、暇だ。だが、『飛天』一同はあながちそうとも言い切れないかもしれない。
「翔ぶが如く翔ぶが如く、翔ぶが如く！！」
御者の頭の上に足を乗せながら、左之助が馬車上で叫んでいる。ハッキリ言ってうるさい。
「目指すは大阪、いざ行かん！！・・・っと！！」
左之助は最後に決めたのだが、突然下から突きでてきた刀を危なっかしく避ける。下では、
「チッ、外したか」
刀を突き立てた張本人の斎藤が舌打ちしていた。それを見てクロノと剣心が若干引いていた。
「てめー斎藤、何しやがる！！」
「うるさくて話が出来ん。少し静かにしてろ」
冷たく言い放つ斎藤に押され、左之助は胡坐をかいて黙りこむ。
「話を続けるぞ。時空管理局の船は大阪湾に停泊している。とにかく今はそこに行けばいいわけだが」
「・・・妙でござるな」
「お前もそう思うか」
規模はどの程度かわからないが時空管理局の船は住人にとって見慣れないもののはず。なのにそれに関する記事や速報はもちろん噂までない
「何らかの手段でも使っているのかも知れんがな」
「んなこたあどうだっていいんだよ」
また左之助が口を挟んできた。斎藤が静かに刀を抜く。
「今は俺たちは依頼を受けてんだ。つべこべ言わずにクロノの話を信じて大阪まで行きゃいいだけだ・・・ぢ！？」
結構カッコイイ事言ったんだけど、言い終えた直後に刀が尻に突き刺さる。犯人はもちろん斎藤である。
「てめえ一度ならず二度までも！！殺すぞコラ！！」

「静かにしてろと言ったろうがこのボケが。話のコシ折りやがって」
本当にこの二人は仲が悪い。本当にこんなんで仕事ができるのか、いやそもそも店として成り立っているのかと少々疑問に思ったクロノであった。
「ったく、とにかく今は急ぎゃいいんだよ急ぎゃ」
志々雄がため息交じりに言う。
「事態は急を要するんだ。刻一刻とその時空なんたらに危機が迫っているのは事実なんだからな」
「・・・やっぱりな、事態は刻一刻と緊迫してるんだよな。だったらなおさら、翔ぶが如く！！」
左之助のこの叫びは、惨劇の幕開けとなった。
「のおっ！！」
ドスドスドス、と高速で刀が飛び出してくる。飛んで避けてもすぐに出てくる。もちろんやっているのは斎藤だとは言うまでもない。
「御者！上のゴミを振り落とせ！」
「あんだとコラァ！！」
『・・・』
この二人の喧嘩は日常茶飯事である。だからもう誰もいちいち突っ込んだりしない。クロノだけは、茫然としていたけども。

大阪湾―。
広域結界を張って人目に付かないように偽装を施してある船が一隻。これこそがクロノの家族や親友が乗船している、時空管理局の次元艦船アースラである。
「クロノ君、遅いなあ・・・」
時空管理局通信主任兼執務官補佐の少女、エイミィ・リミエッタが船べりに肘をついて海を眺めながら呟いた。
「なにかあったのかな・・・？」
だがこの心配は杞憂に終わった。
「てめえコラ！！いい加減にしやがれ！！」

「なら少し黙れ。じゃねえと本当に殺すぞ」
「二人ともいい加減にしろ！！燃やすぞコラァ！！見ろよ、もうクロノが顔面蒼白になっちまってるじゃねえかァァァ！！」
殺すだの燃やすだのとんでもない単語がてんこ盛りの会話が聞こえてきたのだ。結界の中に入れるのは時空管理局関係の者だけだ。『クロノ』という単語も聞こえてきたから、
「クロノ君！？」
とっさに振り向いた。で、目に飛び込んできたのは。
馬車の上で下から突き出てくる刀を必死で避ける青年の姿だった。かなり凄惨な場面。
「え・・・？」
不可抗力という奴だろうか、馬車が横転した。
悲鳴が響く。それが聞こえたのだろう、船員が全員出てきた。なんだ？何があった！？て、誰だあいつら！？みたいなノリで皆が叫び始める。それに続き、馬車の中から八人くらい転がり出てきた。
「だーから言わんこっちゃねえ！！お前らバカ！？」
「騒ぐんじゃねえよボケ。目の前に見慣れない船があるだろうが」
「そんなことはどうでもいいンだ。てか、今はとにかく馬車をどうにかしないと・・・」
「もう、君たちが何の考えもなしに喧嘩するからだよ」
「あっはっは！面白いなあ」
「・・・バカが・・・」
「クロノ殿、大丈夫でござるか？」
「大丈夫くないです・・・」
台詞で大体誰だかは分かると思うけど、上から志々雄、斎藤、縁、ユーノ、宗次郎、蒼紫、剣心、クロノです。
「クロノ君！おーい！！」
エイミィがとびっきりの笑顔で手をいっぱいに振る。船員たちも、執務官おかえりー！ソイツら誰だー！
大丈夫かー！？なんて思い思いの言葉で出迎える。

クロノは力なく手を挙げると、そのまま二度目の気絶状態に入った。

そんなこんなで剣心達『飛天』一向はアースラ艦内に入った。

宵の月が鈍く光った。雲が月を覆い隠す。ややあって、大粒の雨が降ってきた・・・。

第二閃：出立の日って色々ゴタゴタするのが常（後書き）

次回は会談から始まり会談に終わります。
ク「次回、『話し合いをしたって分かり合えないものは分かり合えないなんて分かり切ってることなのに人は話し合いをしたがるおかしな生き物であるというのを僕は知っているようで知らないのをアイツは知っている』・・・な、長い・・・」
剣「まあ、末永くお付き合いお願いするでござる」
斎「だとしても題名が長ェな」

第三閃：話し合いをしたって分かり合えないものは分かり合えないなんて分かり

題名長ッ！！「ストレスはハゲる原因に～僕らにできることなんて何もない」のパクリ？
銀〇じゃねえか、と思った方は正解です。
まあとにかく読んでください。

第三閃：話し合いをしたって分かり合えないものは分かり合えないなんて分かり

アースラ艦内―。
艦長室にて、剣心達『飛天』一行とアースラ艦長であり時空管理局提督、リンディ・ハラオウンが向き合っていた。
「この度は此処に来てくださり、有難うございます」
「丁重な挨拶、ありがたく頂戴いたす。用件だけを話して戴きたい」
「分かりました。―といっても、もうすでにクロノから聞いてはいると思いますが」
「それでもでござる。まだ彼の話を聞いていない者もいる故」
剣心の要求を受け入れたリンディは、静かに話しだした。

―私たち時空管理局の仕事は、読んで字の如く時空を管理することです。
「時空を管理か・・・とんでもなく規模がでけえ話だな」
―ついこの前までは、それなりに均衡を保っていたのですが・・・覇軍の出現ですべてがひっくり返りました。私たちの上司、その中には次元世界の一つ二つを食い物にしている汚い輩もいるわけです。それは誰なのか、皆殺しにされた今は最早確認のしようがありませんが、我々に反感を持つ世界を次々に自分の傘下に引き入れて、覇軍は私たちを潰しにかかりました。
「汚え野郎は何処の組織にも居るものなんだな」
―そうかもしれませんね。しかし、現実だけをお伝えすれば私たちはもう少数になってしまいました。未だに我々に味方してくれる世界もあることにはありますが、その全てが覇軍に潰されそうな勢いです。
「刃衛も随分と派手にやっているようだな。全く、あの時ちゃんと粛清しておけばよかったが。あの異常殺人者め・・・」
―貴方がたの知り合いなのですか？

「元新撰組。鵜堂刃衛と言えば有名な殺人者だ。主義もへったくれもない、殺しだけが生き甲斐みたいなやつだアイツは。そいつが覇軍を組織し、世界そのものを食い物にしようとしているのか」
―そう、ですか・・・。
「許しちゃおけねェ、が手出しできねえと来たもんだ。だから俺らに協力を頼んだッちゅう訳か？」
―かいつまんで言えば、ですが。
「大体事情は呑み込めたな。別に俺は協力してやっても構わんが、全員の承諾を得ないとな」
蒼紫の一言が引き金になった。
「俺は構わねェ」
「俺もだ」
「僕も」
「拙者も」
という訳で、あっさり皆の承諾が得られてしまった。もっとゴタゴタするかと思っていたのか、リンディは呆然としていた。

「という訳で『飛天』はこれより時空管理局に助太刀をする。このことに異存はないな？」
『応』
「敵は全員叩き斬れ。緋村は不殺を貫けばいい。とにかく、連中のやったことは皆殺し。ならばこちらは『悪・即・斬』を以てこれを斬る。このことにも異存はないな」
『応ッ！』
会談が終わって、まだ出港まで時間がある、ということで、斎藤は全員の志気を確かめた。まず予想通りの結果であった。
その後、訓練場を使わせてくれ、とリンディに頼んだ。快諾してくれたので、とりあえず全員訓練場に入った。
訓練が始まるまで後十秒―

第三閃：話し合いをしたって分かり合えないものは分かり合えないなんて分かり

短え。題名に対して短え。
次回は訓練して、そっから地球の『海鳴市』に飛びます。
左「次回、『次元世界なんてスケールのデカい物は幾ら自分の物差しで測ろうとしても無理があると思ってるやつは意外と無理じゃないってことを覚えとけ』。長えなこれも」
斎「いちいち突っ込むのも飽きた」

第四閃：次元世界なんてスケールのデカいものは幾ら自分の物差しで測ろうとしても

相変わらずタイトルが長いっす。考える時間があんまりないんです。

左「大体てめえは詰めが甘えんだよ」

なんかすっげー批判されてる？

第四閃：次元世界なんてスケールのデカいものは幾ら自分の物差しで測ろうとしてもダメだ

さてさて斎藤たちが訓練場に入って早三分。
訓練用疑似敵兵を相手にしていた『飛天』メンバーは、早くも疑似兵を血祭りに上げていた。
龍槌閃！瞬天殺！！虎伏絶刀勢！！！陰陽撥止！！！！
なんか大技いっぱい飛び交ってるせいで、訓練場は既にボロボロのグチャグチャになってる。てか見る影もねーし。

案の定殺るだけ殺って飛天メンバーは帰ってきた。その中にクロノも混ざってたのは秘密・・・
局員たちが呆然としている中を悠々と帰ってきた八人、もとい九人は物足りなさそうな表情で（その最たるのが左之助）あった。
あんなのは敵じゃねえ、的だ的。同感だな。全く、全然殺った気がしないなあ。物騒なこと言うんじゃねえよ宗次郎、字が違うぞ字が。
もう一回できないかな？無理でござろう？
各々罵詈雑言を吐くだけ吐いて、後は暇そうにしていた。相手が悪かったな。
『飛天の皆さん。艦長室まで来ていただけますか？』
通信が入った。八人は立ち上がると、艦長室へと歩を進めた。残されたクロノは何気なく窓を見やる。するとその眼に、此処にあるはずのない、いや居るはずのない『何か』が映った。

「ご足労有難うございます。早速依頼を受けていただけますか？」
八人が頷くと、リンディは頭を下げて、依頼内容を話した。
「まずは此処とは別次元の地球の中の日本の『海鳴市』に行ってもらいます。そこで覇軍が怪しい動きをしているというので」
「委細承知した。で、次は何だ？俺らに覇軍を潰せとでも言う気か？」

「いいえ。覇軍の狙いは『ジュエルシード』というロストロギアです。それを貴方がたに回収してきてもらいたいんです」
「？そのロストロギアというのはなんだ。新手の兵隊の名称とでも言うのか」
「いいえ、違います。ロストロギアとは過去遺失物―平たく言えば古代文明の遺産です。次元世界を一つ二つ消し去るくらいの力を秘めているので、覇軍がそれを持てば何をしでかすかわかりません」
「おいおい、そんな危険物を俺らに集めさせようってのか？最悪の場合は死んじまうかもしれねェんだろうが。そんな危ないものに手ェ出すのは御免だぜ」
斎藤がかぶりを振る。が、そこに割って入った人物がいた。
「斎藤さん！！」
「クロノじゃねェか。一体どうし―」
「この狼・・・港にいたんですけど！？」
「妖月？なんでこんな所に居やがる。留守は頼むと行ったはずだぜ」
入ってきたクロノと飛天の狼、『妖月』というらしきそれに斎藤は一瞥をくれてやった。それに対して妖月がこう返す。
《何を寝惚けたことを言うておる一。いざとなったら此処に来いと言うたのはお主じゃろうに？》
『しゃ、喋ったぁぁ！？』
喋った、狼が―。クロノとリンディが悲鳴を上げる。ま、無理もないけど。
《なんじゃ、儂が喋れるのがそんなに珍しいか小娘》
「グダグダ言ってんじゃねえよ。何時までもくっちゃべってたら叩ッ斬るぜ」
《フッ、儂を斬れぬということはおんしらが一番良く知っておろうに》
「そろそろ本題に戻るでござるよ。読者の皆様がこの場面飛ばすかもや知れぬ」
《む、済まぬことをしたな》

「どっち向かって言ってんだ、その言葉。明らかにカメラ目線じゃねえか」
最後に志々雄のツッコミが入って、一同はようやく本題に戻ることができた。
「最悪の場合はそれも有り得るかも知れませんが、そうならないように常にクロノを巡回させます。ですからそれは心配しないでください」
「分かった。危険を見越してその依頼、受けてやろうじゃねェか。皆異論はないな？反論は認める、変更は認めないが」
「それ選択の余地がねえじゃねえか」
「ゴチャゴチャ突っ込むな。ハイかイイエで答えりゃいいんだ」
「・・・斬り殺したくなってきたわ、コイツのこと。左之助、今だけ手ェ組むか」
「おうよ。上等じゃねえか」
「ハーイ、自主規制。僕は賛成しますよ」
「拙者も賛同するでござる。これ以上皆を喧嘩させるわけにはいかぬ」
「俺も賛同しよう。バカ共のイザコザは見るのも加わるのも真っ平御免だ」
「俺もそうしようかな」
台詞率が高ェェ！！と志々雄がツッコんだが無視。
第一次世紀末喧嘩勃発の危機が過ぎ去り、とりあえず全員賛成ということで事は済んだ。
「では明日にも出港します。準備はそれぞれに任せます。では解散してください。本当にありがとうございました」
「いえいえ、むしろ謝るのはこっ・・・」
《アッチで一と真実が斬り合おうとしとるが》
「やめろ二人ともォォ！！こんな所で死傷者を出すつもりでござるか！？」
最後の最後までグッダグダな会談であった。

深夜零時。剣心は自分に与えられた部屋のベッドの上で、逆刃刀を手に月を見上げていた。冬が近くなってきているのか、寒空に満月が一段と輝いて浮かんでいた。
「緋村さん、起きてますか？」
「クロノ殿？どうしたのでござるこんな時間に」
「寝付けなくて。それに、貴方と話がしたくて」
「話？如何様な話でござる？」
クロノは俯いていた。やがて顔を上げると、こう切り出した。
「緋村さん、『強さ』って何なんですか？」
「強さ、でござるか？」
「はい。僕は十四歳です。この年齢（トシ）で執務官になったのは僕が初めてで。それでみんなに『お前は強い』って言われます。でも、僕にはその『強さ』が分からないんです。何が強さで、何が強さじゃないのか・・・」
「ふむ」
「貴方なら何かわかるかと思って・・・妖月さんにも相談したんですけど、『自分で考えてみろ』って一蹴されてしまって」
「左様でござるか。拙者の答でよくば教えるでござる。
―拙者は幕末（むかし）、多くの人を斬り殺した。全ては新時代の為に。しかし、今思い返してみればその無用な殺人のせいで、多くの人が悲しみ苦しんでしまうようになった。拙者が斬った人の家族、恋人、親友―。その人々にとって、拙者は悪でしかない。人斬りとして生きてきて、分かった事はこれだけ。そして気付いたことも一つだけ。強さというのは、目に見える物ではないのでござるよ。この目に映る限りの人々の小さな幸せ一つ一つを護らんとする意志、それが強さでござる」
「・・・」
「拙者が言えるのはこれだけ。後の事は自分で考えて答えを出すしか手段（て）は無い」

さ、早く寝るでござるよ。剣心はこれだけ言うと、静かに目を閉じた。
クロノは剣心の部屋から出ると、自室へと歩き出した。頭の中は、先ほどの剣心の言葉でいっぱいだった。
『この眼に映る限りの人々の幸せ一つ一つを護らんとする意志、それが』
「強さ・・・」
クロノは改めて「強さ」という単語を口に出してみた。心にかかっていた靄が晴れていくのが分かった。
強さが何か、少しわかった気がする。けど分かっただけじゃダメだ。実行できねば意味がない！
月を見て、密かにクロノは決意を固めた。

で、翌日。
大きく伸びをしながら、クロノはベッドから起き上がった。晴々とした、清々しい心地だった。
「よーし、今日も一丁やりますか！」
拳を突き上げて、クロノは叫んだ。

『出港しますよー！』
「「応！！」」
エイミィの呼びかけに皆が応じ、アースラは大阪湾より次空間へと出港した。

無の境地、それが次元世界と次元世界を繋ぐ『次元道』である。ここを通り、アースラは地球へと進んでいく。

やがて地球が見えてきた。ちなみに今ここは宇宙。
「飛ばしますよ。準備はいいですね？」
「ああ」

「何時でもいいぜ！」
「では行きますよ。３，２，１・・・Ｇｏ！」
転送室なる場所から剣心達は地球へと転送された。けど、誰も気付くことがなかった。二名、地球とは全く違う場所に飛ばされてしまったことに―。

「おろろろろ！！？」
「ぬあああああ！！？」
ベタンッ！！とよくある効果音が夜の街に響く、剣心と縁が道路に叩き付けられた音だ。
「おろろ・・・流石に痛い・・・」
「痛々々・・・もっと丁寧なものかと思ってたゼ」
各々感想を口にした後、二人はあたりを見まわす。
「しかし、此処はどこでござる？」
「分からないな・・・京都の町で無いことは間違いない」
シンキングタイム、とはいかなかった。
「きゃああっ！！」
悲鳴、それに続き爆音。咄嗟にその方向をみると、目に飛び込んできた光景があった。
少女がイタチのような動物を抱いて、黒く大きな何かから必死で逃げている。
ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

第四閃：次元世界なんてスケールのデカいものは幾ら自分の物差しで測ろうとしても

次回は剣心＆ａｍｐ；縁が化け物退治です。

第五閃：排除するべきは異形と不埒物（前書き）

剣心＆ａｍｐ；縁が化け物退治、左之助とユーノは二人の少女と出会います。

第五閃：排除するべきは異形と不埒物

「はあッ、はあッ・・・」
栗色の髪の少女―高町なのは―は、自分を追いかけてくる異形から必死に逃げていた。
「しつこいなあ・・・！！」
息はとっくに切れている、だが此処で足を休めたら死ぬ。まだこんな所で死ぬ訳にはいかない。
だがしかし、運というものに見放されてしまっては手も足も出ない。
「きゃあ・・・！！」
転んでしまったのだ。抱え込んで護っていたフェレットも転げ落ちてしまった。恐怖に足が竦み、立ち上がることすらままならぬ状態であった。
「私・・・このまま死んじゃうの・・・？」
口に出すことではない。そんな暇があったら逃げろと言いたいが、そう冷静になれる程なのはも大人ではない。目には涙が浮かぶ。来ない者とは分かっていても誰かに助けを求めてみる。
「誰か・・・誰か助けてッ・・・！！」
そして異形がその前脚をなのはに振りあげたまさにその時であった。
「っと！縁、頼むでござる！」
「分かったッ！」
ふわりと体が軽くなった。誰かに抱きかかえられたのだと認識するまでに一秒、そして自分が助かったのだと認識するまで一秒、計二秒の思考が終わったなのはが目を開けると。
紅い着物、これまた赤い髪。優しい、女性のようにも見える顔立ち。特徴的な左頬の大きな十字傷。腰の刀があらわすのは、この人物が剣客であるということ。しっかりした胸板が、この人物が男性であるということも示す。
「大丈夫でござるか？小娘殿」

時代がかった口調。そして、小娘殿と尊称で自分を呼んでくる。
只者じゃない。服装からして既に。いや、そもそもこの人は日本人なのか？
ふわりと着地した男性は、なのはを地面に降ろすと刀を抜く。その刀もまた特徴的。
「峰と刃が逆？」
剣術道場でもある我が家に二振りは備わっていた日本刀、一度だけ見たことがあるがその拵えとは明らかに違う。
「さ、小娘殿は此処でじっとしてるでござるよ」
それだけ言うと、男性は異形に向かって駆け出した。

「縁！」
「兄サン、ようやく来たか。コイツ意外とやるぞ？気を抜いたらやられるかもしれない」
「委細承知。なら攻撃の手を休めない手で行くでござる」
「初撃は頼んだ」
剣心は逆刃刀を構え、異形の懐に飛び込む。刀の腹を左手で支え、斬撃を繰り出す！
「飛天御剣流：龍翔閃！！」
少しだけだが、異形が怯む。そこを見逃す縁ではない。
「怯んだな・・・ならばテメェはここまでダ！倭刀術：掌破刀勢！」
掌に添えた倭刀に掌打の勢いを乗せた威力の高い斬撃は、異形の顔面を文字通り真っ二つに引き裂いた。まだ息はあるはず、ならばもう一撃！
「兄サン！！」
「分かっている！飛天御剣流：龍槌閃！！」
人に非ざるものに手加減は必要ない、剣心は迷わず逆刃を返した。
自然落下力をたっぷり乗せた斬撃は、これでもかと言わんばかりに凶悪な威力とともに、異形に断末をもたらした。

「終わりにござる」
「二対一なら大したことはなかったナ」
二人は意気揚々とへたり込んでいるなのはの元にやってきた。
「小娘殿、怪我はないでござるか？」
「へ？あ、大丈夫です！」
「大丈夫そうだな、この様子じゃ」

少女は一通りお礼を述べた後、「高町なのは」と名乗った。
「あの、本当に有難うございました、お侍さん！」
「お侍さん？あ、まだ名乗ってござらんかったな。拙者は緋村剣心と申す」
「俺は雪代縁ダ」
剣心と縁もそれぞれ名乗る。まあこれで多少は打ち解けただろう。お互い名が分かったからにはコミュニケーションもとれるというものだ。
「そう言えば、お二人はこんな所で何やってたんですか？」
「それを聞きたいのはこっちでござる。女子がこんな夜更けに一人歩きするなんて」
もっともな質問に、なのははこう答えた。
「声が聞こえたんです。『助けて』って。それで飛び出してきたんですけど・・・」
「逆に助けられてしまったと」
「ハイ・・・」
「準備は事前にしておくものだナ。今回は急だったしまだキミは小さいから無理もないが、戦はいつ起きるか分からない。これからは常に準備しておくんだナ」
「は、ハイ！」
「それはそうとなのは殿。早く家に帰らないと母上殿、父上殿が心配するでござろう？」
「はい、でも結構遠くまで来ちゃったし、此処から一人で帰るのは

ちょっと怖いかな・・・あ！」
なのはが顔を輝かせる。何か思いついたようだ。
「そうだ！お二人とも、一緒に家まで来てくれませんか！？」
「「はぁ！？」」
素っ頓狂な声をあげてしまう二人。無理もないな。
「何を言い出すでござる！？」
「こんな夜更けに男二人が小さな少女に・・・明らかに犯罪だナ」
「？」
自分の言ったことの意味が幼い故に分かっていないなのは。うーんとシンキング中の二人の袖を引く。
「それにお二人の事お母さんやお父さんに紹介したいし。きっと受け入れてくれますよ」
「そういうものなのでござるかなぁ？」
「分からん・・・この日本の仕組みは分からない・・・！！」
ぼやく二人を無視して、なのははフェレットを抱き上げて歩き出した。
ほら早く行きますよー！と急かされ、二人は渋々歩き出した。二人の心中はこうだった。
―面倒な事にならなきゃいいけど。
ジャストにピッタリだったなんて、知る由もなかったけど。

「・・・で、此処がなのは殿の家なのでござるか？」
「喫茶店葵屋？聞いたことあるような無いような・・・」
「さ、行きますよ～♪」
機嫌良さげななのはに対して、二人はまたしてもシンキング中であった。脳裏に元凄腕のエロジジイの姿が・・・アレ？
「お父さん、お母さん、ただいま！」
「お帰り、いきなり飛び出して行って何処行ってたんだ？」
「心配したのよ？」

店の中から、なのはの父親、母親と思われる人物が出てきた。二人は外にいる剣心と縁に気付いた。
「あら、貴方方は？」
「こんな夜更けにどうしました？」
「この人たちね、私の事助けてくれたんだよ」
うーんうーんと考える二人は全く聞いていない。頭の中にはエロジジイ、イタチ娘、御庭番衆、料亭ｅｔｃ．．．
だが、さてしもあるべきことならねば。

シンキングから目覚めた二人は事情を説明し、早々に葵屋を出て行こうとした。が、あることに気が付く。
「あ、この世界の金持って無いナ」
「あ・・・そーいえば」
重大なことである。死活問題となってくるこの事態、どうしようかと思った矢先、なのはが一つの提案をしてきた。
「あっ、そうだ！葵屋(ここ)に泊りませんか！？」
「「はいぃぃッ！？」」
本日二度目の絶叫である。またこの子はとんでもないことを言い出した。
「正気でござるか！？」
「犯罪者の仲間入り、決定だナ・・・クソっ」
ぼやく二人を気にもせず、親子三人はそうだそれがいい、うんうんそうしようみたいなノリになっている。
「私たちはいいわよ～♪貴方達みたいな人は大歓迎！」
「俺からもＯＫだ。キミたちは良い人そうですし」
「「ＯＫしちゃうのかァァ！！？そこは反論しろよォォォ！！」」
その後二人はなだめられすかされ、小突かれひねられその他いろいろなんかされた揚句。
「もう分かったでござる・・・」
「もう此処から逃げられそうに無いナ・・・チクショウ・・・」

二人は葵屋に居候することになったのだった。

「ああチクショウ、此処何処だ？」
「さあね。分かる訳ないだろ」
とある町の路地裏。左之助とユーノがフラリフラリと彷徨っていた。
道に迷ってはてさてどうしましょうという状況である。
「ああクソッ。どーすりゃいいんだ」
「自分で考えなよ。俺は手助けしないよ」
「冷てえ事言うなよ。仲間だろーが」
「あんまり慣れ合いは好きじゃないんだ。俺は仲間だろうがなんだろうが甘ったるい慣れ合いはしたくないの」
「どんな人間なんだよ・・・友達なくすぜ」
「その程度の友達なら最初から要らない。キミたちっていう家族もいるしね」
「うれしいこと言ってくれるなオイ」
台詞率が異常なほどに多くなってしまったが気にしないで。

第五閃：排除するべきは異形と不埒物（後書き）

次回は左之助とユーノが不埒物退治・・・
退治多くないか？

第六閃：喧嘩屋と槍士と魔道少女（前書き）

納「真剣手にして精神統一！」

真剣ではありませんが木刀片手に精神統一です。

ではどうぞ

第六閃：喧嘩屋と槍士と魔道少女

剣心＆ａｍｐ；縁が拉致られている頃。
左之助とユーノはとある町の路地裏を歩いていた。
「お、こっち行ったら街中に出られそうだ」
「流石ユーノ・・・」
ユーノが指さす方に行けば、ピッタリ街中に出られた。

「さて、後はどーすかっねえ」
「さ。宿を見つけないと・・・ん？」
二人は違和感に眉をひそめる。若い女性の叫び声のようなものが聞こえてくる。聞いていれば、どうやら不逞の輩の暴行らしい。幸い、会話を聞いている限りでは事が起きていることはないようだ。
「ユーノ」
「ん、行こう」

「離して、下さいッ・・・！」
「可愛いねえ。そう言われて離すと思うかい？テスタロッサちゃん」
「フェイトを離せ！！じゃないと・・・！！」
「オイ。お前さんそんなこと言える立場？明らかに身動き取れない状態じゃん」
「さっすが半田様。『氷結牢』の堅固さ、半端ねぇ！」
忍び装束のようなものに身を包んだ数人の男が、半透明の氷の牢屋に閉じ込めてあるオレンジ色の髪の少女と地面に押さえつけてある金髪の少女を取り囲んでいた。
先に言っちゃうと、この男たち『覇軍』の兵士である。その証拠に、槍だの小刀だの手に持っている。上役の命令に従い、今ここにいる二人の少女を拉致しようとしている次第である。
「半田様は最強だ。それに俺たち雑兵と捕虜の安全を第一に考えて

下さっている」
「まさに今世紀最高の人間だな！あのＢＩＧＢＯＳＳもびっくりするはずだぜ」
「和平・ＭＩＬＬＥＲもビックリの仕事量の多さ、惚れ惚れするよな」
なんかＭｅｔａｌＧｅａｒの話題が出てるが、そこは無視無視。
「これで俺等の任務はおしまいだ。後はこのガキどもを安全且つ最速に船まで運べばいいだけだな」
「ああ、もうすぐ夜が明けちまう。急ぐぞ」
男たちが氷の牢屋と金髪の少女を持ち上げて運び始めようとした矢先であった。
「行かせねえぞ誘拐犯野郎ォォ！！」
『何者だ！！？』
突然前方から男が一人飛び出してきた。それに続いてもう一人。
最初の方の男は白い服、そして巨大で縦長の袋を肩から提げている。
もう一人は片袖の着物、さらに槍を背に掛けているではないか。
「敵か！」
「おおともよっ！！覚悟しろゲス野郎ども！」
「誘拐なんてあまりいい行為じゃないな、それなりに覚悟はできてるんだろうね」

左之助はまず担がれている少女を助けようと、手近な兵士を殴り倒す。
続いて袋から出さぬまま己の相棒『斬馬刀』を横薙に振るう。
「ぐはぁ！」
「がべっ！！」
二人吹っ飛ぶ。金髪の少女が地面に落ちる。
「左之助、役目は終わり。後は俺がやるよ」
「分かった。・・・流血沙汰だけは御免だぜ？」
「俺にそれを言う？」

左之助が金髪の少女を抱きかかえて戦線離脱したのを横目で確認すると、ユーノは自身の自慢の槍『天牙槍』を鞘から引き抜き、横に一閃する。氷の牢屋を持っていた兵士の両腕が斬りおとされる。そこにできる一瞬の隙を見逃さず、さらに縦に斬り下ろし、その兵士を文字通り一刀両断。
気付けば朝日が顔を出していた。血飛沫が朝日に輝いて実に幻想的だ。
「ったく、流血沙汰は御免だって言ったばっかりじゃねえか」
「だから、俺にそれを言うかって」
ユーノは薄笑いを浮かべて左之助に返す。無邪気と言えばいいのか、残忍と言えばいいのか。ともかくそれは人のそれでは無かった。
「ひいいッ！！」
「オイ、ゲス野郎。おめーらの大将様に言っとけ、誘拐なんて最低だぜって」
逃げ出す兵士の背中にこう吐き捨て、左之助は腕の中の少女を見た。
「きゅ～・・・」
「あらら、気絶しちゃってら」
朝っぱらから誘拐されかけて、さらに血飛沫見せられたとあっては気絶するのも当然だけど。
氷の牢屋を斬り崩し、もう一人の少女を助け出したユーノが左之助を振り返る。
「お仕事終わり。俺等は退散するよ」
「言い方が悪ぃ、もう行くぞ」
ユーノを引っ張り、左之助はその場を後にした。残されたオレンジの髪の少女は呆然としていた。

そして昼下がり。左之助とユーノは未だこの町を彷徨っていた。
「全っ然分かんねえ、地理が・・・」
「地図でも貰っとけばよかったね、クロノ君に」

「ああ、失敗だったな。それに金もねーし」
「一番の失策じゃないかな、金欠なのは分かってるけど」
相変わらずの毒舌が左之助の心を穿っていく。
高い太陽がジリジリと照りつける。それもイラッとくるし、何よりも連れの毒舌がもっとイラッと来る。
で、ふと気付く。そう言えば、人がいない。空気も歪んでいる。そして、視界の端にあの黒装束。
「ユーノ・・・もう一騒動あるみてーだな」
「ああ、そうみたいだね。俺の『牙』も血に飢えてるみたいだし」
二人は頷くと、それぞれの武器を構えた。袋から斬馬刀を取り出し、鞘から槍を引き抜く。
「さあ行くぞ！」
「ああ！」
また戦に巻き込まれる、いや飛び込んでいく二人の戦闘バカであった。

「またかい・・・しつこいねえ！」
「アルフ・・・どうしよ・・・」
「どうしようもこうしようもないよ！目的の物は取ったんだ、すぐに逃げるよ！」
アルフと呼ばれた、先刻のあの少女の声が聞こえた時点で、左之助は確信した、覇軍は本物のゲス野郎どもだ、と。
「でも二人だけじゃ・・・またやられるよ？」
「それは・・・分かってるけど・・・」
アルフともう一人・・・たしか『フェイト』だったはずだ。迷いが残る目で敵を見回す。二十三十は超えている、こんな数でかかってこられたら敗北は必至―。
「待てコラァ！！」
「性懲りもなく誘拐行為かい。最低を通り越して最悪だね」
そこに割りこんでいった二人。傍から見れば只のバカ。

また現れたあの二人。何が目的なのかは分からないが、とにかく得体が知れない。
「あ、あの人たち・・・・！」
「また来たのかい・・・・！バカなのか、それともって、なんでここに来てるのさ！？」
フェイトとアルフが気付いた時にはあの二人は自分たちの傍らにいた。
「なんでって手助けに来たんだろーが。気ィ付いたら空気は歪んでるわ人はいないわで、さらには黒装束共が見えたからもしやとは思ったんだよ」
「別に目的とか大層なものは持ってないから安心しなよ。只のお節介と取っておいてくれよ」
「お節介って・・・命捨てる気かい！？」
アルフのもっともな問いかけに、槍をもった青年が答える。
「命を捨てる？ハッ、俺たちがあんなカス共にやられると思ってる？」
「俺等はそこまで弱くねえ」
二人はこれだけ言うと、敵に突っ込んでいった。
後はもう一方的なリンチである。
「おおおォ！！」
「はああっ！！」
殴り、蹴り飛ばし、斬り裂き、吹き飛ばし、頭突き、刺突ｅｔｃ．．．
凄惨な場面であった。
「あら、もう終わりか。物足りなかったな」
「つまらねえ喧嘩売っちまったぜ・・・まるで弱い者イジメみてーだったな」
てな訳でござって、約二、三分で全敵兵は殲滅された。流石は喧嘩屋に槍士。尋常じゃない強さだ。

「あ、有難う、ございました・・・」
「見苦しいモン見せちまって済まねえな。殺しなんて見たの始めてだろ」
「い、いえ！あの、そんなことはどうでもよくって、助けてくれたことにお礼を・・・」
あの後それぞれ自己紹介をして、今の状況になっている訳だ。
フェイトと名乗った少女は、随分気丈なのだと思われた。あれだけの血を見てもしっかりしている。隣のアルフという少女も然りだ。
「じゃあ気ィつけてな」
「じゃまずは仕事見つけないと。ここの金は一文も持ってないんだから」
「そだな・・・喧嘩屋でもやるか」
「それば駄目だろ」
「あの・・・お二人とも、御金とかないんですか？」
「ああ、恥ずかしいことだがな」
「なら、うちに泊りませんか？」
「「はぁ！？」」
見事にハモッてしまう二人。そーいや高町家でも同じやり取りが行われてたよな。
「貴方達は悪い人には見えないし・・・私たちの事を助けてくれたんだから、その位はやらないと」
「いやいや、悪いし。てゆーか俺等男よ？」
「そーいう問題じゃなくって、ただ単に泊るだけなんだから良いと思うけどな、俺は」
「アルフもいいよね？」
「うん、良いと思うよ。フェイトの言った通り、悪いようには見えないしね」
「そういう問題なのかよ・・・」

その後色々と議論した挙句、結局二人はフェイトの家に泊ることと相成った。

命の恩人だからって、ねぇ？

第六閃：喧嘩屋と槍士と魔道少女（後書き）

次回は斎藤＆ａｍｐ；蒼紫の回です。
戦闘シーンはありませんが・・・

第七閃：The significance of being（前書き）

存在意義。
今回のタイトルにもなった、最近になって真剣に考え出した話題です。やっぱり授業でこういう話題を取り扱うあたり麗澤中学校は素晴らしい学校です。
はやて「何で英語やの？」
その方が感じ出るかなって。それに今和訳してる英語本の中にこのフレーズが出てきたんだ。で、なんか感じちゃってさ。
はやて「ふうん。でも駄文になったらあきまへんよ？」
はい、頑張ります。
はやて「ほな始まります。せーだい楽しんでおくれやす」

第七閃：The significance of being

海鳴市の海岸線―。
もうそろそろ潮も満ちようかという頃であった。
一人の少女がその波打ち際に居た。足が不自由なのか、車椅子に乗っている。
「綺麗やなぁ・・・」
京都訛りのある喋り方。少なくとも此処の生まれではないことが分かる。
「独りで観るのもええけど、やっぱり誰かと観た方がもっと綺麗なんやろな・・・」
天の川に見とれて、潮の満ち加減を忘れてしまっている。そのあたりやはりまだ子供なのだろう。
「家族がおったらなあ・・・」
そう呟く少女、八神はやては密かにこう願っていた。
―家族ができたらええのに。
この願いが現実のものになるなど、この時はまだ予想もできなかったであろう。

「・・・此処は？」
「分からない、だが失敗はしていないようだ」
はやての居る波打ち際のおよそ１００？ほど後ろ。斎藤と蒼紫が佇んでいた。
どうやら同時刻に飛ばされたとあっても、降り立つ時間帯というのはバラバラになるらしい、今は夜だ。天に天の川もかかっている。
「星か。久々に見た」
「お前はあまり空を見ないからな。空は重要な情報庫だ。きちんと確認する癖をつけておけ」

「分かった分かった。暇な時に見てやるよ・・・ん？」
蒼紫の忠告に適当に返した斎藤が、あることに気付く。蒼紫が斎藤の視線を追うと、一人の少女が波打ち際に佇んでいた。
「何をやってる、あの小娘は。もうすぐ潮が満ちるというのに」
「気付いていない線が強いな。どれ、忠告しに行ってやるか？」
「見殺しにするよかマシだな。行くか」
二人は少女に向かって歩き出した。

「！」
「小娘。そんなところで何をしている？」
「何って、星を見て・・・って貴方方誰ですか？」
はやては近づいてきた男二人に話しかけられた。質問に答えてしまったが、まずこの人たちは誰？
「俺たちか？別に怪しいものじゃないさ」
「・・・見るからに怪しい雰囲気醸し出てるんですけど・・・」
「警戒するな。何をしようという訳でもない。只、そこにいるといずれ潮が満ちて海の藻屑になるぞ、と教えに来ただけだ」
「あ、そうだった・・・」
「星を見るのはいいが、周囲の状況にも気を配っておけこの阿呆が」
「すみません・・・星を見るのは日課で」
警官風の服の男が教えてくれた、気付けばだいぶ潮が満ち始めている。いけな、陰陽師の子孫なのに。白い外套を羽織った男の人は、無口なままだ。
私はこの時、予想だにしていなかった。この人たちが、私の『家族』になるなんて・・・
Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｕｎｔｉｎｕｅｄ．．．

第七閃：The significance of being（後書き）

二回にわたって連載します。今回はちょっと短いですね。

第八閃：今を大切に（前書き）

はやてと斎藤、蒼紫がお話、そして志々雄と宗次郎があの場所へ！

第八閃：今を大切に

少女は、「八神はやて」と名乗った。斎藤、蒼紫もそれぞれ名乗り、三人はやけに早く打ち解けた。
「綺麗や思いませんか？この星空・・・」
「ああ、綺麗だ」
「ム？斎藤、一体どうした？」
「なんでもない」
「？」
様子がいつもと違う斎藤の様子に蒼紫が首を傾げている。その様子を見てはやてはくすりと笑う。
「何を笑っている？」
「なんでもありまへん」
適当に誤魔化してはやてはまた星読みを始まる。
―貴女の願いが叶う―
星はこう告げている。
陰陽術とは本当に便利なものだ。未来の先読みもしようと思えば出来る。吉兆を占うことも出来れば戦闘にも使える。
そんな陰陽術を扱う一族の末裔、それが八神はやてである。
彼女は類稀な才能を持って生まれた。逆にその過ぎた力のせいで足が不自由なのかも知れないが。

「斎藤、そろそろ行かねば・・・」
「そうだな。はやて、気を付けてかえれよ」
「・・・・・やはりお前何か変だぞ。熱でもあるのか？」
明らかに様子が違う斎藤の言動や顔に蒼紫が疑惑を持つ。何故だかやわらかな口調になっているし、顔もほころんでいる。変、変だ！
「はい、御二人もお元気で」
別れを告げ、三人はその場から解散しようとした。が、此処でもあ

の事態が起きてしまう訳である。恒例のあの事態が。
「蒼紫。この世界の金はあるんだっけか？」
「・・・いや、無いと思うぞ」
「阿呆が・・・」
「俺に言うな」
そう、この世界の金がないっていう事態。リンディさんに頼めばよかったのに。大バカ者どもだな。
「しかし、どうする？」
「あの・・・御二人、何か？」
「金がないっていうことだ。どの世界であろうが金がものを言うのは変わらないらしい」
「ふうん・・・せやったら私の家に来ますか？」
「お前の？親はいいのか？」
「私に家族はおりまへんの。せやから家には私一人」
「・・・そうか・・・済まない、悪いことを聞いてしまったな」
「いいんです。私も一人じゃさみしいし、御二人がうちに来てくれればって思たんです」
はやての話を聞き、蒼紫は頭を高速で回す。結論は一個だけ出る。むしろそれしか出ない。
「厄介になろう・・・キミさえよければな。斎藤、異論はないな？」
「当たり前だ。はやてがいいと言うなら俺は別に断る気はない」
「・・・お前、やっぱりおかしいぞ」
「話、まとまったん？」
「ああ。お前の家に厄介になる」
はやての顔がパッと輝く。せやったら早う行きましょ、と言い、はやては慣れた手つきで車椅子を操作しようとする。が、不意に動かなくなる。見れば斎藤が椅子を押してくれている。
「今のお前は一人じゃない。誰かの協力が要るときはきちんと言え。手伝えることなら手伝ってやる」
「斎藤・・・何かに憑かれたか？」

明らかにおかしい斎藤の行動に蒼紫が目を見張っている。無理もなかろう。
そんなことにはお構いなく、斎藤ははやてを押して歩き出した。蒼紫は慌ててそれを追った。

・・・若干二名、忘れらている人たちがいる。
志々雄と宗次郎だ。この二人、一体どこに行っちまったんだろうか？
時を遡ること、フェイト、アルフと左之助、ユーノが出会って一時間程経った頃―。
「あべしっ！！」
「うわっ！！」
二人は地球とは明らかに違うところにいた。昼下がりだっちゅーのにやけに暗い場所に。
「痛々々・・・此処何処だ？？」
「あいてて・・・災難だなァ」
思い思いの感想を口にする二人の目の前には、荘厳な建物。コイツが陽の光を遮って、影を作っていたのだ。
「でけぇ・・・こりゃ何の建物だ？」
「へぇー、こりゃ凄いや」
デカい、とにかくデカい。いま計画が進んでいるという議事堂よりデカいかもしれない。
何なのだこの建物は。確かめるには手は一つだ。
「潜入だ、行くぞ宗」
「はいよ」
二人は建物に潜入した。

しゃがみ前進で進み、途中道が狭いところは張り付きで移動。またあるところではホフク移動。たまに段ボールを被って隠れながら・・

・ってこれじゃまんまＭｅｔａｌＧｅａｒじゃん・・・しかもｓｏｌｉｄのほう。ツッコミはさておき、二人は最奥部まで辿り着いた。敵兵には全く出会わなかった。まあ完全ステルス成功というものだ。じゃんけんでどっちに進むか決める。結果、志々雄は右、宗次郎は左となった。

志々雄の方を先に見ておこう。

志々雄はゆっくり進んでいた。なるべく愛刀の『無限刃』が鍔鳴りを立てぬように細心の注意を配りながら。

やがてドアがあった。耳をそばだてると、寝息が聞こえてくる。声のトーン、息の仕方。どうやら女のようだ。そうっとドアを開けてみる。部屋は広く、真ん中に大きめの椅子がある。そこに四十代、いや三十代後半と思われる女性が眠っている。どうやら寝込んでいるようなので、何か此処に関する情報の一つでもないものかと思った志々雄は部屋を捜索し始める。書類等を調べていくうち、どうやら此処は人を蘇らせる術を研究しているらしいことが分かった。

「バカなことをするもんだねえ。一度死んだ人間は二度と蘇りはしないってのに」

小さく吐き捨て、志々雄はさらに探索を続ける。やがて彼は部屋の中にもう一つドアを見つけた。そこに近づくと、ドアは自動で開いた。志々雄はこれが自動ドアだと知らない。

その中には、とんでもないものがあった。生体ポッドの中に、少女が裸で浮いている？

「な・・・何でェ、こりゃあ・・・」

生体ポッドを知らない志々雄は呆然とする。が、すぐに殺気を感じて横に飛び退る。彼がいた場所を、紫色の雷が通り過ぎていく。

「誰なの？あなた・・・」

気付けば、先ほどまで寝ていた女が起きて、自分に杖を向けていた―。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｕｎｔｉｎｕｅｄ．．．

第八閃：今を大切に（後書き）

斎藤さんがおかしくなってるのには実は理由があります。その理由とは何でしょうか？
志々雄絶体絶命！？
さあどうなるんでしょうか？

第九閃：資格は無ぇ（前書き）

志々雄がカッコイイです。宗次郎が鬼神です。
変わりゆくプレシアにご注目あれ。そしてかの『幕末四大人斬り』のあの人の影もちらついて・・・
ていうか『幕末四大人斬り』知ってる人居んのかな？

第九閃：資格は無ぇ

見つかってしまった・・・正直、かなりヤバい状況である。宗次郎がいたら何の苦労もなかったのだろうが、今彼はいない。
「誰なのと、聴いているんだけど？」
「・・・人に名前を聞くときは自分から名乗れ。母上に教わらなかったのかよ」
露骨な舌打ちの後、女は
「私の名前はプレシア・テスタロッサ。大魔導師プレシア・テスタロッサよ」
と名乗った。志々雄も名乗らぬ訳にはいかない。
「丁重な自己紹介どうもありがとよ・・・俺は人斬り、志々雄真実だ」
「人斬り？どうでもいいけど・・・いつから此処に？」
「今さっきだ・・・気付いたらこの建物の真ん前に倒れてた。連れと一緒に此処に忍び込んで、俺は此処に入ったって訳だ」
「そう。それもどうでもいいことだわ。早々と此処から出て行ってもらえる？」
志々雄は頷く。
「見ちゃいけねえモン見ちまったみてえだしな、退散させてもらうことにするよ。けどその前に、幾つか質問していいか」
「別に構わないけど？」
「有難よ・・・じゃあまずは一つ。あそこの筒に入ってるあの子。明らかに死んでるよな。アンタはあの子をどうしたいんだ」
いきなり核心に触れるような質問をされて、プレシアの表情が曇る。
「私はあの子を生き返らせる・・・私の娘を、アリシアを・・・」
「ふうん。成る程ね、何らかの事情であの子を亡くしちまったッちゅう訳か。それに対して俺の意見だ。死んだ人間は何があっても生き返ったりはしねえ。俺は狂っちまうほど殺した。殺した奴らは全

員この世から消えちまった・・・」
過去を語る志々雄に、プレシアは軽い侮蔑の眼差しを投げかけていた。
それが、その方法があったのよ、と心中で嘲笑いながら。
「出来ることならそいつら全員に詫びたい。殺してすまなかったって。けど今更そんなこと言われても仕方ねえんだよ。死んじまったことは曲げられねえんだ」
絶対に、そう絶対に。何故なら、それは自然の摂理だから。
「バカね・・・その方法が見つかったからこうして生き返らせるなんて嘯けるのよ」
「そうか。そいつはよかったな。じゃあもう一つ。仮にあの子を生き返らせたとしようか。それでアンタはどうするつもりだ？」
「簡単な事よ。またあの時のように一緒に暮らすのよ」
「結構なこった。けど、俺はそれでその子が、アリシアが喜ぶとは思えねえな」
「どういう、事・・・？」
「まんまの意味だよ。俺には分かる、アリシアって子があんたの後ろで微笑ってるのが」
もちろん嘘である。彼に霊感は無いし、ましてやそんな事が分かる訳がない。
「まあ憶測だけどな」
「何が言いたいのよ・・・？」
「分かってるんだろ？何回も言ってるけど、死んだ人間は生き返らねえ。ましてや生き返ることなんて望んでねえんだ」
「嘘・・・そんなの、嘘よ・・・」
だんだん崩れていく、壊れていく。難攻不落の城の壁が、天守閣が崩れて落ちていく。いいぞ、この調子だ。このまま行けば言葉だけでこの女の目を覚まさせられるかもしれない。あのフェイトとかいう女の子の事も気になる。頼むプレシア、そのまま崩れていってくれ！

「よっ！とっ！はっ！」
壁を蹴り、天井を蹴り、疾走り、斬り、立ちはだかるカラクリどもを鉄屑へと変えていく。
「ふふふっ、ふふふふ・・・あはははっ！！」
館中に響くかと思うほどの笑い声。もちろん宗次郎のものである。楽以外の感情を封印してしまった彼は人を殺すことに何の躊躇いも戸惑いも無い。哀の感情がないからである。
とまあ彼はトラップに引っかかってしまい、こんな風にウジ虫の如く湧き出てくる傀儡兵どもを斬り捨ててはいるのである。長曾根虎徹もそろそろ限界かもしれない。だがそれより先に傀儡兵の数が尽きそうである。
宗次郎の十八番『縮地』の前に成す術もなく機能しないガラクタの如く何の抵抗も出来ずにバラバラにされていく傀儡どもを思い浮かべてほしい。
背筋が寒くなる。しかも相手は笑っている。恐ろしい事この上ない！宗次郎、恐ろしい子！

「じゃこれで最後だ！書類にあったフェイトって子。あの子は何だ？」
「フェイトは・・・フェイトはアリシアのクローンよ。アリシアの肉体を持ち、記憶を持ってはいるけれど出来損ない・・・」
「じゃあ何で造った？そんなんだったら初めから必要無かったんじゃねえのか？それとも、どうしても造らなきゃならなかったのか？」
「う・・・」
「こいつは俺の憶測だが・・・アンタは生前のアリシアの言葉の一つに触発されたんだ。何か、重大な、そう例えば・・・」
志々雄は此処で核心に触れた。そしてこの言葉は引き金となった。

プレシアの記憶の糸が徐々に巻き取られていく。思い浮かんだのは、在りし日の娘の一言―。
『アリシア、もうすぐ誕生日ね。何が欲しい？』
『ん～、アリシアね～・・・』
娘の一言が、志々雄の言葉とかさなった。
『「妹が欲しい」』
「だからだろ？だからアンタはフェイトを生み出したんだ」
彼女を現実に引き戻したのは志々雄の言葉。
「そう、そうよ・・・あの子が私に言った、言ったのよ・・・」
「だろ、つまりフェイトはアリシアの妹。それを出来損ないなんて言っちまっていいのか？アリシアがそれを聞いたらどう思う？そこまで考えて物を言いな。何の考えもなしに、言葉を紡がないことだ」
「そう、そうなのよ・・・今まで、全く考えてなかった・・・」
「・・・アンタに、親を語る資格は無ェ。アリシアに会いたかったら、まずは自分を見つめ直すんだな。俺は只の剣客だ。連れもそうだ。けどそういうことに関しては長けてるぜ。俺らでよければ、力になる。それに宿もねえし、出来れば泊めてほしいんだけど」
最後は見事にお願いになってしまったが、志々雄の言葉は確かにプレシアの心を動かした。
―自分を見つめ直せ
（そう、それなのよ。今まで目を背けていた事実から目を逸らしてはいけないんだ。この歳になって、こんな少年に諭されるなんて。私、確かにどうかしてた。これからは―）
自分と真正面から向き合う、そう心に決めた。
「泊めるくらいならいいわ・・・キミは私に一番大切な事を気付かせてくれた恩人だものね」
「随分人が変わったな。それが一番だけどな」
この後、傀儡兵を殲滅し終えた宗次郎がやってきて、二人は時の庭園に宿泊することと相成った。

「どうだ、あの二人は」
「活きがいいな。誠に斬り甲斐のありそうな獲物よ」
一方、時の庭園外部。二人の男が話し合っていた。
一人はオレンジ色の髪を後ろで結わいており、俗に言う「イケメン」ヅラである。身体にピッタリ合った黒いスーツ、革帯（ベルト）に佩いた二振りの刀が特徴的だ。名を《半田仁左衛門》という。
この男は悪名名高い《覇軍》の副司令官・・・簡潔に言うならトップ2だ。そして覇軍内最強無敗、その気になれば次元世界の一つ二つ独りでぶっ潰すことなんて朝飯前な滅茶苦茶危険な人物である。性格は至って温厚なため滅多に怒ったりしないが、なるべく喧嘩は避けたい。
もう一人は丁髷和服、腰には刀を差している。殺人鬼特有の血に飢えた眼。言わずと知れた有名な土佐派の維新志士《岡田以蔵》である。
『幕末四大人斬り』に数えられた程の剣達者であるが、拷問を受け殺されそうなところを覇軍司令官、鵜堂刃衛に救われた訳である。以来刃衛に心酔しており、覇軍仕事人としてその兇剣を血に染め上げている。
「以蔵殿、仕事の日時は此処にフェイト・テスタロッサが来たとき。その際に全員殺れ」
「委細承知した。その仕事、必ずや完遂して見せますぞ」
「では、楽しみにしていますよ」
半田は消えた。正確には彼は陰陽師であり、そのうちの一つ『三十八：瞬（またたき）』を使って移動しただけである。
「ククク、人斬り抜刀斎が後継者、志々雄真実、そして『天剣』の瀬田宗次郎。お手並み、数日後に拝見させていただきますぞ」
岡田もまた、闇夜に消えていった。
―決戦は近い。相手はあの最強の人斬りである―

第九閃：資格は無ぇ（後書き）

いかがでしたでしょうか…？
久々の更新で駄文になってませんかね。志々雄の言葉におかしなことか無かったですか？
次回は剣心組です。

第十閃：温泉行きと恋心と紅の少年と人斬り以蔵（前書き）

相変わらずの長い題名！承知してください。
「さよなライオンなんて言わせねーからなァ！」ｂｙ相楽左之助

第十閃：温泉行きと恋心と紅の少年と人斬り以蔵

「「温泉ん？」」
「そうよ～♪温泉！二人も来ない？」
ある日の昼下がり。突然の桃子からの提案であった。
「温泉でござるか・・・。あまり乗り気にござらんなあ」
「俺もだ。温泉なんて、なぁ・・・」
あまり乗り気でなさそうな二人は、ただいま薪割りの真っ最中だった。道具が逆刃刀と倭刀であるのは言うまでもない。
「何か理由があるのかしら～？」
「理由・・・」
「そんなものは特にないが・・・」
「じゃあ来なさい？家主の権限を使わせてもらうわ。なのはからの御願いでもあるし。文句は言わせないわよ。異論は認めるけど変更は認めないからね」
「「斎藤！？乗り移ったかァァ！！？」」
突然の発言にのけぞる二人。桃子が壬生狼に見えてしまったのは言うまでもない。

そして、拉致も同然の形で連れ去られた、もとい温泉旅行に出かけた二人は後部座席でなのはと戯れていた。と言ってもなのはが逆刃刀をいじくり回してるだけだが。
「なのは殿、それ拙者の大事な愛刀なのでござるが・・・」
「けちな事言わないで！」
「何処の暴君！？ハッキリ言ってネロ大帝にしか見えないでござるよ！！？」
「なんでネロを知ってんだよ」
非常に不毛なやり取りの後、一行は海鳴温泉に着いた。それぞれ部屋をとりチェックインすると、振り割られた部屋へと移ったのであ

った。

「ええ湯じゃのう！やはり日の本の温泉はまっことええぜよ！！」
土佐弁で豪放に笑い飛ばすこの男、言うまでもなく岡田以蔵である。
こういうリラックスできるところではやはり故郷の癖が出てしまうのであろうか。まだ昼なのに、昼風呂とは警戒心の欠片もねえな。
「しょうまっことくつろげるけんの。やはりええの～」
のほほんと呟く彼の姿はもはや人斬りには見えない、ただの田舎の兄ちゃんである。
そんな時であった。あの男達が入ってきたのは。
「！あの男・・・」
赤毛に大きな十字傷を左頬に持つ優男と、白髪の長身。
「人斬り、緋村抜刀斎じゃのう」
覇軍が最も恐れる男、人斬り抜刀斎。
「こりゃ奇遇じゃのう。どれ、話だけでもしておくか。・・・しっかし、この湯はほんにええぜよ！」
あがろうかとは思ったが、やはりお湯から脱しきれない以蔵であった。こんな様子だけ見ていると、この人は案外悪い人ではないのかもしれない。

身体を洗い、湯船につかった剣心、縁、恭也の三人は、ゆっくりと湯を満喫していた。
「良いでござるな～♪」
「だろう？此処は海外からも評判が高いんだ」
他愛もない会話をしていると、一人の青年、先程から入っていた青年が近づいてきた。
「失礼するがで・・・」
「土佐弁？」
土佐弁である。この辺りでは珍しい。
「ちょうと、あんさんと話がしたいき。ええの、・・・緋村抜刀斎」

「「！」」
この男、剣心の事を『緋村抜刀斎』と呼んだ。一体どこで、如何にしてこの情報を掴んだのか？
「心配するなや。わしの名前は岡田以蔵じゃ。知っちゅうろう？」
「岡田以蔵！？あの『人斬り以蔵』か！？」
「よう知っちゅう、あんちゃん。・・・わしは今は丸腰じゃ。何をしゆうという訳ではないき」
「で。以蔵殿、如何様でござる？」
「ずばり！剣について語りとう思う！」
『はぁ！？』
剣について語る。どんな願い！？何処の鑢〇花！？
「剣士として感じちゅう。おんしら全員剣士じゃろう。わしァ剣術について語りとう思うちゅうきに」
「はあ・・・」
「想像と違うなあ」
意外に社交性のある以蔵に多少なりとも動揺しつつ、三人は自分達の情報を漏らさぬよう細心の注意を払い、以蔵と剣について語った。白熱しすぎて、最後の方には「唐竹は打ち下ろすのが一番ええきに！」「いや、斬り砕くでござろう！」「違うな。斬り崩すんだ」「いやいや、突き落とすんだよ」なんて議論になってしまい（しかも場所がサウナ）、終わるころには全員やせ細っていた。その姿を見た士郎は、四人をミイラかと思ったという。

「まっこと面白かったぜよ！これでしまいやき、皆達者でなァ！」
「以蔵殿もでござるよ～！」
「縁があったら酒でも酌み交わそう！」
「機会があったら手合わせを願うぞ！」
すっかり打ち解け、仲良くなってしまった四人。これが後に、以蔵の心に大きな波紋を起こすことになる。
「意外と社交的な人でござったな？」

「そうじゃのう。あ、感染っちまった」
以蔵に親しみを感じた剣心らは部屋に戻った。恭也は別の部屋なので彼とは別れて剣心と縁は自室に戻った。そこにいたのは。
「ムニャ・・・」
「なのは殿？」
「なんで逆刃刀を抱いて寝てるンだよ・・・？」
なぜか逆刃刀を抱き枕にして寝ているなのはであった。
「なのは殿。起きるでござる。拙者の愛刀を返して」
「ムニャ・・・やだ」
「寝言！？寝言なのでござるかこれは！！？」
なかなか逆刃刀を離してくれず、眠ったまま剣心に抵抗し続けるなのはであった。

一旦彼らから視点を外そう。
所変わって、此処は八神家。この日招かれざる客がやってくるのを誰が予想できたであろうか？―いや、招かれざるという事はない。悪く言えば災厄に見舞われた少年だが、よく言えば運命の少年である。
「放浪者？」
「ハイ、この間保護したばっかりなんです」
「なんで俺等に押し付けるんだ？」
「だって暇そうだし」
「・・・」←無言で鬼神丸国重を引き抜く
「すいませェェん！！？許してください！！前言撤回します、だからその刀を仕舞ってェェェ！！！」
突然のクロノの訪問、そこで言われた辛辣？な言葉に斎藤がキレた。全くもって不毛なやり取りである。そして、要点だけをかいつまんで読者の皆様にお教えしたいと思う。
クロノは廃墟となったミッドチルダの中で一人の少年を見つけた。その少年は心が空っぽのようで、何に対しても反応しない。そして

事もあろうか、性格が斎藤に似ているのである。家伝の者というひと振りの刀を持っているので、剣達者の斎藤に修行でもつけてもらえれば戦闘力にもなるし、心も戻るんじゃないかという思惑があるのである。
そんな彼が唯一心を開いている少女も一緒に引き取ってほしいとのこと。
「面倒くせえ話だな。二人も引き取らなきゃならねェのか」
「家族が増える〜！！」
「はやては嬉しそうだが・・・アイツがいいならいいか」
「斎藤。病院でも行くか？」
またしても不毛なやり取り。そして少年と少女が連れてこられた。
「ホウ・・・」
紅の髪に、澄んだ蒼い瞳。腰の一振りの刀が特徴的な少年と、明らかに武家のお嬢さん。だが気立てもよさそうで、何より誰に対しても物腰柔らかそうな感じのする子だ。
「名前は？」
「俺は・・・俺の名前は、エリオ」
「三条燕です。宜しくお願いします」
これが、狼の若子が生まれた瞬間であった―。

第十閃：温泉行きと恋心と紅の少年と人斬り以蔵（後書き）

以蔵さんが壊れたァ！！？

次はエリオの修行編です。つまり八神家の日常です。

第十一閃：若き狼の牙、剛の刃、信念の刀（前書き）

牙突最高！斎藤さん最高！
あの人がすべて正しいと思います。
Ｃ－ＧｕｓｔａｖｕｓやＭ４７やＰＴＲＤ１９４１でＴ－７２ｃｕｓｔｏｍ虐めてました。友達が敵兵一人にたいして一発ずつ「電磁波照射ガン。」を使ってた件について。
とにかくエリオ君とフェイト達のお話です。ではどうぞ。
「悪・即・斬」と「悪一文字」が海鳴市に閃くとき、何かが生まれる・・・

第十一閃：若き狼の牙、剛の刃、信念の刀

「悪・即・斬」。
俺の唯一の正義にして絶対の真理。師匠に出会い、この正義に出会った。
思えばあの頃の俺は何処までも暗く、冷たく、悲しい世界にいた。
燕と出会い、師匠に出会い、蒼紫さんに出会い、はやてに出会った。
俺たちはあの時から、紛れもない「家族」だった。

―ＦａｄｅＩｎ―
「オイ。何時まで寝てる気だ、起きろ阿呆」
師匠の声で我に返る。今俺は師匠と剣の修行中だ。左片手一本刺突を絶対の必殺技にまで極めた師匠の代名詞『牙突』。『壱式』と『弐式』、『参式』までは撃てるようになったものの、未だ『零式』のコツが掴めずにいる。先程も師匠の零式で見事にブッ飛ばされ、気絶ちてしまったという訳だ。
「痛・・・」
「構えろ。あと少しだ、せめて一発くらい俺に入れてみろ」
「分かってんだよ、んな事ぁ・・・」
悪態をついてしまったが、師匠は本当に教え方がうまいと思う。何事も食らってからでないと身には着かないという理由で、何度も吹き飛ばされブッ飛ばされ、幾度となく気絶したし、何度骨折紛いの状態になったか分からない。それでも俺の体がその技の性質を記憶していた。
そのお陰で壱～参式までの『牙突』はこの身に着いた訳だが。
「何度も言ったハズだ。『牙突・零式』は『間合いの無い密着状態から上半身の撥條のみで繰り出す』と」
師匠に触発され、俺はまた構える。やや腕を後方に下げ、何時でも上半身の撥條を縮められるようにしておく。

そんな時だった。
「二人とも、ご飯やで。そろそろ終わりにしたら？」
俺の義妹・・・ということになってる、はやてが道場に入ってきた。
「うるせぇ・・・せめて零式を会得するまで・・・」
「最後まで意地っ張りやね。程々にしとかいないと死にまんねんよ？」
「はやての言うとおりだな。一旦休むぞ」
「・・・分かった」
俺は渋々家伝の刀『天空（ｃｏｍｐａｓｓ）の（　ｏｆ）羅針盤（ｔｈｅ　ｓｋｙ）』を鞘に納め、道場を後にした。

「分かった？無理はしいひん事。ほんで道場を潰すのホンマに止めてもらえる？」
「「・・・自重するわ」」
「それでよし」
一家の仕切り役、はやてに窘められた俺と師匠は素直に頭を下げた。
さっさと飯を済ませて修行に戻りたいものだ。
後で蒼紫さんから教わった事だが、『壊す』を京都弁では『潰す』というらしい。

「「おおおおぉぉっ！！」」
師匠の牙突はまさに『牙』だ。竹刀なのに真剣のような鋭さと破壊力を以て俺を潰しにかかってくる。怖いとは思わない。向こうが真剣ならこちらはさらに真剣に応じるのみだ。
だがそんな心意気でも力量の差というのは明確に技に現れる。
また俺は吹っ飛ばされ、床に叩きつけられる。肺が潰れるかと思うほどの衝撃が全身を突き抜ける。痛みを堪え立ち上がる。零式、その基本の型だけは確実に掴み、俺にも一端のものが撃てるまでになった。此処まで来るのに昼食から5時間。何とも時間が掛かってしまったものだが、とりあえずはノルマクリアだ。後は師匠に競り勝

てばいいのだが、師匠の実力がそれを許さない。という訳で、全ての修行の行程が終了したので、後は自主的なトレーニングということになった。師匠に追い付くために！俺自身が強くなるために！

―ＦａｄｅＯｕｔ―

「思い返してみても・・・下らねえクソガキだったな俺って」

俺はタバコを口にくわえ、火を付ける。相変わらずの喧騒が耳に心地よい。

警視庁の警部補となって思った事がある。この世の全ては『悪・即・斬』で成り立っている。悪人を斬らねば正義は保てない。

今や俺も２１歳だ。燕を嫁に貰って、子供もできた。

今はこの現実を大切にする。そして一生護っていく。この心も、思えば師匠から貰ったものだった。

「・・・阿呆が」

空に向かって呟いてみた瞬間、部下が入ってきた。

「警部補！事件です！」

「分かった、すぐ出る」

相も変わらず事件ばかり起こっていやがる。俺達警察に安息はないのかもしれないな。フッ、阿呆が―

私の相棒は、今日も元気だ。もう一つの相棒も調子がよさそうだ。

いつもいつも、こんな夕焼けの空を見ると7年前の事が脳裏に浮かぶ。

心の師匠であり、ずっと憧れだった人の面影が虚空（そら）に描かれる―

―ＦａｄｅＩｎ―

「オイ、起きろ。起きろってオイ」

「もう止してあげなよ左之助。この子ねぼすけさんみたいだから」

いつものように左之助とユーノが私の事を起こしに来る。本当は起

きてるんだけど、左之助が揺すってくれるまで起きてあげないのが私の癖になってしまった。
二人が来てから私の家は急に賑やかになった。五月蠅い二人にツッコむのも悪くないかもしれないと思うようになったこの頃だ。
あの日、私たちを助けてくれた二人を家に泊めてあげる事にした日。思えばあの日が私の生き様が変わった瞬間かもしれない。

「ようやく起きたかよ、寝惚すけさん」
「うるさい・・・」
「事実でしょフェイト」
「むぅ・・・アルフまで・・・」
いつもの朝。二人が来てからずっとこんな調子だ。朝ごはんも二人のお陰で随分豊かなものになってきた。身体の調子も良くなってきたし、いつも以上に動けるようになってきた。

二人は強い。私たちなんかは足元にも及ばないくらい。きっと死ぬくらいに修行してきたんだ。
二人がうちに来てから幾日かが経った頃だっただろうか、私とアルフは彼らに「修行を付けてくれ」と頼み込んだ。二人は快く頷いてくれたけど、あの時のユーノの声色と表情は今でも忘れる事が出来ない。
「でも、俺たちに師事するってんなら、死ぬ覚悟でやれよ??」
次の日からは冗談抜きで地獄だった。アルフはもっと地獄だったかもしれない。左之助は優しかったからまだ手加減してくれたけど、ユーノはほんとに容赦がなかった。的確に急所を狙ってくる、とアルフが泣きついてきた事があったくらいだ。
そんなこんなで私は拳を、アルフは槍術を会得した。左之助の拳法は我流だったけど十分通用すると思う。打たれ強くなった私に対して、アルフは一撃必殺の力を手に入れた。かなり歪んでいたけれど、あの二人は良い教え方をしていたと思う。

―ＦａｄｅＯｕｔ―

つい長く話してしまった。改めて自己紹介すると、私はフェイト・テスタロッサだ。
機動六課急襲部隊隊長として日々喧嘩に明け暮れている。こう言うとどこぞの誰かのようなプ―タロー生活かと思われるが、決してそんなことはない。私はれっきとした公務員だ。それにしては大雑把で荒っぽいと思うが。
『フェイト』
「ん？」
不意に、相棒『赤兎馬』が話しかけてきた。本当にこの馬は不思議な馬だ。話せるあたりが普通ではない。
『もうそろそろ集合だぞ。行くなら早々としないといけねぇんじゃねえのか？』
「あ、ほんとだ。赤兎、ひとっ走りできる？」
『しゃあねえ野郎だ、何時まで経っても。そんなあんたに惹かれたんだがな、馬的に。早々と乗りな、飛ばすぞ』
「おう、頼むわ」
私は赤兎にまたがり、手綱を引いた。赤兎は一声嘶くと、疾風怒濤の如く走り出した。
もうじき夜が来る。急がないと、殺されかける、さっさと行こう。
まだ死にたくないし。

第十一閃：若き狼の牙、剛の刃、信念の刀（後書き）

次回はなのはさんのおはなしです。
水天日光天照八野鎮石、なんちゃって♪

登場人物紹介「弐の巻」（前書き）

予定が狂ったのでキャラ紹介です。

登場人物紹介「弐の巻」

斎藤エリオ（ｃｖ：子安武人）
年齢：十五歳
身長：１６６ｃｍ
武器：天空の羅針盤
斎藤一の愛弟子で優男。瞳の色は青。燕に作って貰った黒い着物と袴を着ている。齋藤から牙突を教わり、その全てを体得するほどの、並々ならぬ剣才の持ち主。齋藤を誰よりも尊敬している。超絶辛党。口癖は「阿呆が」と「アンタの全てを否定してやる」。
家族を失い、ずっと独りだったが、燕や八神家、斎藤などとの出会いを通して人間としての温かみを取り戻していく。

三条燕（ｃｖ：丹下桜）
年齢：十五歳
身長：１４８ｃｍ
公家「三条」の跡取り娘。瞳の色は紅。黒髪をショートカットにしており、前髪にエリオからのプレゼントの菊の簪（かんざし）を付けている。超絶辛党。何かに（特に権力）束縛されるのが大嫌いで、自分の地位に嫌悪感を抱いている。趣味は旅、紅葉（こうよう）眺め、花見。特技は小動物との会話。しっかりとした性格で、誰に対しても物怖じしない発言をする。責任感が強く、一旦やり始めた事は最後まであきらめない。頑固なところもあるが、其処もチャームポイントみたいなもの（エリオ談）。交渉上手。
趣味が趣味なため、毎年、春と秋にはテンションが上がる。
頭にエリオに貰った椿の花に似た髪留めをつけている。ウインクするのが癖らしく、よく右眼を瞑っている。

緋村心悟（ｃｖ：杉田智和）

年齢：十九歳
身長：１７８ｃｍ
武器：木刀『八重桜』、真剣『龍閃』
緋村剣心の双子の兄。瞳の色は深紅。容姿は限りなく剣心に近いが、目つきはかなり鋭い。剣心と違って口が悪い。剣心以上の飛天御剣流の遣い手であり『第十四代目の比古清十郎』。しかしほとんど剣を使うことはなく（人斬りへの罪の意識から、無意識に刀に触れない）、剣の鍔と鞘の口を糸で縛ってあるため、剣は抜かずにもっぱら拳法で闘う。『緋剣商店（ひけんしょうてん）』という小さな商い問屋の店長をしている。剣心と同じく後ろで結んだ髪は腰辺りまで伸びている。常に片袖の着物を着ているため、『銀さんスタイル』とよく言われる。人斬りをやっていた時は『紅桜（べにざくら）』と呼ばれ、今は木刀を使っている。いつもやる気がない顔をしているが人を惹きつけるカリスマ性がある。
比古清十郎の証である『白外套』と宝刀『龍閃』を所持している。

登場人物紹介「弐の巻」（後書き）

短かったですが、こんなものです。
この三人、後々に重要なキーマンとなってきます。

第十二閃：飛天、久遠に、永劫に（前書き）

飛天御剣流に関係しまくってるお話です。
見慣れたキャラが出てきます、「えっ、此処で！？」ってやつらが。
感想等お待ちしてます。
とらハキャラも出てくる、一人だけ。

第十二閃：飛天、久遠に、永劫に

熊本県霊厳堂。此処に、一つの小さな商店があった。
―緋剣商店。それがその店の名前だ。従業員は店長を合わせてたったの五人だが、非常に活気があり、辺境にありながら人気の店だ。何の因果か運命か。此処に一人の少女が舞い込んでくる。その日を境に、日常は狂い始める。廻り始めた独楽は一人歩きし、やがては事態を有り得ぬ方向へと持っていく。
なんてシリアスな事言っても緋剣商店の一同には届かない訳で。
さあ、始まります。

「って待て待て待て！何だこのオープニングは！長ったらしいだろ！」
「仕方ねーよ。これが作者なりの頑張りなんだよ。歪んでるけど」
「歪んでるっつーか、ひねくれ曲がってんじゃねーか。中二病全開じゃねーか」
「父様。これは中二病ではない。そう、言うなれば『るろ剣病』だ！」
「どんな病だそれはァァ！！それただのるろ剣中毒じゃねーか。お前は黙ってろ混沌（カオス）の覇者（カイザー）！！」

「・・・どうするこの空気。父上たちボケツッコミ全開してるけど」
「仕方ないよ。初登場だもん。だから私たちが締めよう」
後ろでギャーギャー騒いでいる己の家族を呆然と見つめていた金髪に紅と翠の虹彩異色の少女と、肩に白い子狐を乗せた碧銀の髪にこれまた蒼と杜若の虹彩異色の少女は頷き合うと、急にカメラ目線になる。
「「こんなんですけど、これから『飛天の絆編』始まります！！」」
かくして、物語は始まった訳である。初っ端からグダグダだったの

は仕方ない事である。初登場時はみんな調子にのっちゃうんだよ。
―第一閃：初登場時ってみんな例に漏れず調子に乗っちゃうよね。
え？そうでもない？―

『旅行ぉ？？』
「そ♪旅行！熊本まで」
「最近旅行多いでござるな」
「気にするな兄サン。これがこの家の仕来たりなんだきっと」
今、夏の真っ盛り。学校は夏休みに入っています。いつものように逆刃刀と倭刀で薪を割っている剣心と縁さん、そして恭兄と美由希姉、そして私は素っ頓狂な声をあげてしまった。
剣心の言うとおり、最近旅行が多い。母さん、調子に乗っているんだろうか？それとも私が剣の修業を始めたから道場でも探してくれたのだろうか。
あ、一つ説明をするのを忘れていた。剣心を呼び捨てにしているのは、彼がそう望んだからである。
「拙者の事は呼び捨てにしてくれ」と。私としては「お兄ちゃん」と呼びたいところなのだが・・・。

否定する要素もないし断る理由もない。何より母さんならどんな手を遣ってでも私たちを連れていこうとするだろうから。抵抗しても無駄だ。
結局私たちは拉致も同然の形で熊本に連れて行かれた。
自由行動。ただしなのはは剣心と共に行動する事。これが父さんが私に付けた規制だった。私としてはこの上なく嬉しい事だ。恭兄が憤怒の表情で剣心に飛び掛かって行ったけど、縁さんに叩き伏せられて母さんに「Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩ」という名目でどっかに連れて行かれた。・・・死んでなきゃいいけど。
私たちが向かったのは、かの剣豪宮本武蔵が晩年住まい、『五輪書』

を著したとされる「霊厳堂」だ。剣士として修業を積み始めた私としては実に興味深い場所だったので、剣心に連れて行ってもらった。彼もそこそこ興味があったようで、快く了承してくれたのだった。

えー、どうも。緋村心悟です。
ご存じのとおり、俺たちはオープニングでやらかしたので今自分の娘に叱られています、ハイ。
お母さんかこいつらは。どんだけ大人びてんだ。つーか俺が育てたんだった、ハァ。
俺と共にやらかした息子二人・・・「緋村大和」と「緋村九曜」は部屋の隅っこでブツブツと何か呪詛のようなものを呟きながら膝を抱えている。どんだけ酷い目にあわされたんだか。
俺の前で正座している娘二人・・・「緋村小夜」と「緋村葉月」は表情こそ笑っているものの、眼が完全に死んでいる。
「父上・・・何されるかは分かってますよね？」
「お仕置きですからね？罰として九頭龍閃と千鳥黒天、受けてもらいますからね？」
「お手柔らかにな」
観念して、俺は眼を閉じた。こいつらの攻撃如きで斃れる俺じゃないけど、やっぱ痛いだろうな。
そんな時だった。救いの手が来たのは。
「そこらへんにしときな」
後ろから可愛らしい声が聞こえてきた。何処となく凛としたその声の主は久遠。俺達緋剣商店のペットである。その正体は九尾の妖狐。しかも白い。
この子狐、この家で一番発言力がある。分かりやすく勢力図で表すと

コレ←←←←コレ
久遠＞小夜＝葉月＞オレ＞九曜
＝大和

と言ったところだ。何故かというとこの子狐、とんでもない妖力を

持っていやがるからである。まともに戦っても負ける。この家全員でかかっても負ける。持久戦には向いていないとのことだが、それを除けばこの家で最強の女である。
「良く言うでしょ。『初登場時の人間はどんな人でも調子に乗っちゃう』って。その類じゃないの。悪気はなかったんだから許してあげな」
「う・・・久遠・・・」
「仕方ないです・・・分かりました」
このように、いとも簡単に二人は引き下がってくれた。狐さまさまである。彼女が俺になついていなかったらどうなっていた事やら。
「心悟もこれに懲りて弐度とオープニングでボケない事。ボケは本編だけにしときなさい」
「・・・あいさ、承知しました」
「後ろの二人も。分かった？」
「「分かりました久遠様・・・」」
「久遠様？まあいいけど」
じゃあちょっと寝るよ、と言い残し久遠は客間へと引っ込んで行った。狐というのは猫よりも気ままなのではないだろうか。
「あ、そうそう。千里眼で観てたけど・・・心悟、『心太』が来るよ」
「あァ！？本当かそりゃあ」
「間違いない。左頬の十字傷、間違いなく心太のだったから」
「ったく、あのバカ弟が。今更何しに来やがったんだ」
「さあね。意図的に来たのではないみたいだよ。・・・そろそろ頃合いじゃない？『絶技』、彼に教えたら？」
「・・・アイツがそこまで成長してりゃ、な」
さーて心太・・・お前が何処まで『理』を理解できたか・・・じっくり見せてもらうとするか。

第十二閃：飛天、久遠に、永劫に（後書き）

はい、という訳で久遠さん登場です。
此処で紹介をしておきます。大体分かっていると思いますが、
小夜＝ヴィヴィオ、葉月＝アインハルトです。大和、九曜は完全にオリキャラです。
また小夜の方は御剣流を、葉月の方はオリジナルの『飛天体術』を会得しています。
飛天体術は完っ全に虚刀流です。技名は変えてますし、説明や明確な表現のない技も全て表現してありますが、虚刀流と思ってくれれば結構です。
更新日を確立します。月木日の三日間です。
それではまた次回でお会いしましょう。

第十三閃：御剣の兄弟（前書き）

るろうに剣心本編の第八十四閃「御剣の師弟」まんまです。比古役が心悟で、それを支えるのが久遠なだけ。四人の子供たちはハッキリ言って今はサブキャラです。それからなのはサンも御剣の修行を開始します。

第十三閃：御剣の兄弟

「まさかな・・・」
「？剣心、どうかした？」
「ん・・・何でも無いでござるよ。少し考え事をしていただけでござる」
「ふぅん・・・」
剣心となのはは手を繋ぎながら繁華街を歩いていた。今の時代は刀は持つこと自体が犯罪だという事で、逆刃刀は袋に入れて担ぐようにして持っている。
今から彼等は霊厳堂に向かうところなのだが、ただの観光とは別の目的が剣心にはあった。
それは、街中でこんな看板を見かけた事に端を発する。
『緋剣商店　少しでも興味のある方は霊厳堂の方までお願いしま～す』
こんな気の抜けた看板を出すような人物は、剣心が知っている中では唯一人。
自身の兄、緋村心悟。たった一人の血を分けた双子の兄弟。
（まさか、兄者が・・・？いや、そんな事は、だが、しかし・・・）
可能性がない訳ではない。それを確かめたい。
（もしも兄者がいた場合・・・俺はどうするのか？）
そんな事を考えていた剣心だった。

剣も

生き様も

季節の愛で方も

そして酒の美味さも
全て師匠から教わった。
今こうして生きているのも
師匠の御蔭かもしれない・・・
「ふぅ・・・」
『万寿』を盃に注ぎ、一口啜ると、心悟は息を吐いた。この酒も師匠から受け継いだものだ。今羽織っている白外套も、腰の宝刀『龍閃』も。そして思念も。志も。
「今度は、俺が師匠になるのか。全く、手間がかかる弟だぜ」
自分の弟の今までの生き方。間違ってはいない。ただ、あのままでは護れるものもその掌から零れ落ちてしまう。
「アイツに後悔はさせたくないからな」
それも兄としての責務なのではないだろうか。弟の憎しみや怒り、哀しみも苦しみも全て受け、それを解いてやるのが兄貴ってもんである。
「心悟。何か考え事でもしてるの」
「久遠か・・・まあな。つかいきなり人間の姿で出てくるの止めてくれるかな」
「この姿の方が動き易いんだもん」
「ただの我儘じゃねェかッ!!」
一喝するものの、久遠は構わず心悟の隣に座る。
流れる白髪と同じ色の狐耳と一本の尻尾。深紅の瞳に美しい顔立ち。巫女服のような服。どこをとっても綺麗だと思ってしまうのは、惚れた弱みなのだろう。
彼女は自分の盃に万寿を注ぐと、そっと飲んだ。
ほっと息を吐くと、真剣な面持ちで聴いてきた。
「気になるの？心太の事」

「んー・・・まあな」
あやふやに答える心悟だったが、隠し事などできない事は分かっていた。だがそんな事を掘り下げて聴くほど久遠も子供ではない。一応は心悟と同じ十九歳なのだ。
「そ。じゃあ私は戻るね。程々にしときなよ」
「ああ」
夜空を見上げる。月が雲に隠れ、あたりは闇に染まった。
「さて・・・『極み』をしっかりと体得してくれよ、心太。バカ弟が」
薄い笑みを浮かべると、心悟は立ち上がった。刀を引き抜くと、横にゆっくりと一閃した。暗中一閃、白光が舞う。
「そして高町なのは・・・見込みありそうだから育てちゃおうかな」

そして、夜が明け、剣心たちへと物語は移り変わる。
霊厳堂近くの旅館で一泊し、すっかり夜も更けたころ。ぐっすり眠るなのはを背負い、旅館から出た剣心は、ゆっくりと霊厳堂へと歩き出した。
「一見つけた」
緋剣商店。ようやく見つけた。まだ灯りが灯っているという事は人は起きているということだ。だが此処から兄の剣気は感じない。
（此処にいないとすれば・・・後は滝当たりか）
剣心は滝へと歩き出した。

手近な木立になのはをもたれさせると、剣心は眼の前の男に向けて歩き出す。間合いまで来ると、逆刃刀を一閃する。無論こんな攻撃が当たるはずもない。
ふわりと空中に飛び上がってそれを避けた男は外套（マント）をはためかせながら剣心の後ろに降り立った。
「・・・普通の一般人に斬りかかってくるたぁ随分と無粋な輩だな」
「・・・」

納刀し、剣心はゆっくりと男に向き直る。
「『比古清十郎』はただの一般人ではないだろう・・・」
「何だ、お前か」
分かり切っていたくせに。そう思いながらも、剣心はこう口にした。
「久しぶりだな・・・『兄者』」
―飛天の兄弟が、この地で再び出会った。

『緋剣商店』道場にて。布団を持ってきてそこになのはを寝かせると、心悟は切りだした。
「さて・・・と。今頃になってノコノコ姿を現わしやがって、俺に一体何の用だ？」
「『緋剣商店』と言えば今肥後（熊本の旧地名）ではちょっとした店だそうじゃないか。何でまた商人に？」
その心太の言葉に心悟は眉をピクリと動かす。
「簡単な話だ。もともと人付き合いの好きな俺はこういう仕事が性に合ってるのさ。丁度今拾い子が四人ほどいて食い扶持も商人だと稼ぎやすいからな」
「簡単に言うな」
「まあ、天才に育てられた天才はなんでもこなしてしまうものだ」
言葉を切り、心太を見つめる。
「話をはぐらかしたな。お前何か言いづらい事を言いに来ただろう。俺はお前の兄貴だぜ、バカ弟の考えなぞお見通しだ」
別段驚く事でもない。分かり切っていた事だ。
心太はそっと兄の前に膝をつく。
「なら・・・単刀直入に言う。五年前にやり残した飛天の奥義の伝授、今こそお願いしたい！」
その懇願を、心悟はあっさり
「断る」

断った。
「あの時出て行ったのはお前の方だ。今更なんで奥義なぞ教えなきゃならねェ」
そう言って自室に戻ろうとする心悟の着物の袖を掴み、心太は兄を引き留める。
「頼む・・・」
「・・・どうやら、気負いは十分のようだな。ならこれだけ聞いておく」
心悟は弟を見据え、こう聞いた。
「お前は、後悔しているか」
ややあって、
「・・・ああ」
「なら、お前は過去と向き合っているか？」
「向き合っているつもりだ」
「なら最後だ。―お前は、もう後悔したくないか？」

第十三閃：御剣の兄弟（後書き）

中途半端なところで終わってしまいましたが、次回に続きます。
此処で重要なお知らせです！！
親友から、
「男塾とリリなののクロスオーバーをやってくれ！！」
と懇願されました。その熱意に押され、今冬から新連載、
「魁！男塾～青年たちよ時代の魁となれ～」を開始します。

第十四閃：抜刀斎の過去（前篇）（前書き）

剣心の口調が変わります。
剣心の過去が明らかに・・・

第十四閃：抜刀斎の過去（前篇）

「お前はもう、後悔したくないか」
突然の問いに、剣心は首をかしげる。
「・・・何が言いたい」
「そのまんまの意味だ。お前はもう後悔したくないのかって聴いてんだよ。お前の不殺は間違ってないが・・・その所為でお前はお前自身の真の力を封印してるんだよ」
「??」
「あの時・・・・・。お前はあのガキを護れなかっただろ。その時に負った心の傷は今も左頬に十字傷として残ってる。それがお前の後悔のカタチだ。それ以上お前を後悔させたくないんだよね俺としては
「・・・」
「まだ憶えてるだろ、明人の事」

回想へ入りま～す、ホワンホワンホワ～ン。
「ってうおおぉい!!今まで積み上げたシリアスムード台無しじゃん!!!回想に入る音とかいいよ!そして古いし!!」
「折角良い感じだったのに台無しだ、作者どうしてくれる!!?」
ハイ無視。では行きまーす。
「「人の話を聞けェェ!!!!!」」

今からおよそ四年前、剣心は不殺を誓い、刀工新井赤空から逆刃刀を譲り受けて全国流浪の旅の最中であった。
そんな中で、彼は一人の少年と出会った。
少年の名は長宗我部明人。底抜けに明るく、人好きのいい十歳の少年であった。
京都の下町で明人は剣心と出会った。

「そこの人！」
「おろ？」
下町に入ろうとした剣心を少年・・・明人が呼びとめた。
「腰の刀。この町じゃ危険物と思われて剥ぎ取られるよ」
「そうなのか？かたじけない」
「いいよ。俺もこの町で暮らして二年になるから、こうやって町の入口に立って入ってくる剣客さんに注意してんのさ」
「殊勝な事だ。暇じゃないのか」
「そりゃ暇さ。旅に出るくらいの事はしたいよ。生憎とそんな機会はないけどね」
少年は微笑うと壁に背をもたれ掛けさせた。そんな彼に、剣心はこう持ちかける。
「丁度俺は旅の最中なんだが。良かったらついてくるか？」
「マジでかッ？良いのか！！？」
「ああ。一人旅もいいものだが、やはり話し相手がほしくなる」
「じゃあ行くよ！オレ、長宗我部明人ってんだ。宜しくな兄ちゃん！！」
「俺は緋村剣心だ、宜しくな明人」
これが剣心と明人の出逢いだった。

明人は前述の通り底抜けに明るい子だった。
どんなに暗い時も冗談なんか言って皆を笑わせたりするのが得意だった。
そのくせ「オレも兄ちゃんみたいな剣客になるんだ」と一丁前に夢なんか語ったりして、大人びた一面もあった。
だが何よりも、この少年には過ぎたる力があった。
とある村で―。
火事が起こった。原因は簡単、火の不始末。
普通ならば全焼するまで待つ。だがこの火事ではそうも言ってられなかった。

一つの家に、独り少女が取り残されたのだ。
助けを求める声に、その場に居合わせた剣心が咄嗟に駆け寄ろうとしたその時。
彼よりも、誰よりも先に明人が動いた。
「『水神よ　我に加護を与えたまえ　願わくば我に護る力を与えたまえ　主たる誇りを我に与えたまえ　龍の御子よ　今降り立て』陰陽道の八十九：『嵐天気龍』！！」
妙な詠唱と共に手を天に掲げる。
するとどうだろうか、極太の竜巻が大量の水を孕んで燃え盛る家屋を取り囲むようにして発生したのだ。
あっという間だった。まさに刹那の間に火は収まり、少女は無事助け出された。
明人は村人から崇められた。当然である。
余談だが、彼の一族は先祖を辿れば安倍清明に行きつく。そして明人からさらに線を延ばした先に、他でもない、『八神』がいるのだ。
言うなれば彼ははやての先祖なのである。

村を発ち、東海道中で剣心は明人に問うた。
「明人、お前は陰陽師だったのか・・・？」
「ああ。意外かい？」
「当たり前だ」
今時陰陽師など珍しい。てっきり平安のころに廃れたと思っていたが。
「今の日本にも魑魅魍魎は闊歩してるんだよ。俺たち長宗我部流陰陽家はひっそりと、未だに魑魅魍魎を討伐して生きてるんだよ」
「そうだったのか・・・てっきり俺は明人は長宗我部元親の血を引いているのかと思っていたが」
「ああ、元親の血も引いてるよ。ただ俺は清明の血が濃かっただけ」
「・・・ますます訳が分からん」
スケールがでかすぎる。

が、過ぎたる力を持つ者は例に漏れず、魔女狩り然り民衆の手によって消される運命にある。
明人の場合は、違った。民衆か、政府か。ただそれだけの違い。
或る夜、剣心と明人が暗くなった町を歩いていると、突然、武装した一団が現れた。
見ただけで分かる。新政府軍だ。
「！？」
「新政府軍！？何だってこんな所に・・・」

第十四閃：抜刀斎の過去（前篇）（後書き）

えー、新政府軍が出てきました。
この流れで行くと明人は・・・もう分かりますね？
次で過去と十字傷にまつわる因縁の話はおしまいです。
そして次の次でいよいよ伝授開始です！

感想等待ってます。

第十五閃：抜刀斎の過去（後編）（前書き）

明人君が・・・どうなるんでしょうね。
そして剣心が真の強さを取り戻す！！
短いですがお許しください。学生なもんで時間が足りないんです。
そろそろ中間試験もありますしね。
ではどうぞ

第十五閃：抜刀斎の過去（後編）

「新政府軍・・・！？何だってこんなところに？」
剣心の素朴な疑問は、振われた槍の一撃で判明した。
「まさか・・・討伐軍！？」
槍の穂先を逆刃刀の逆刃で一閃し斬りおとすと、剣心は明人と共に後ろへ飛び退く。
「遂に俺にも年貢の納め時が来たか・・・！」
だが何もせずに負ける彼ではない。今は明人もいる。剣心は逆刃刀を構え直し、明人は腰の小太刀を抜き放ち政府軍へ斬りかかっていった。
「『天統べる龍よ　海原の翔け鳥よ　我を導け　裁きを下せ』陰陽道の九十八：天龍海翔！」
「飛天御剣流！龍巣閃！！」
鬼神の如き強さで、二人は政府軍を圧倒していった。勿論だれも殺してはいない。
だが忘れてはいけない事がある。それは『相手は自分たちを殺す気でかかって来ている』ということだ。つまり、温い心持ちで戦っていてはいつかは負けるということに等しい。

一刻程経ったであろうか。今は記憶があやふやになってしまっているが、これだけはハッキリと憶えている。
胸を刺し貫かれた明人が崩れ落ち、自分は脇腹を撃たれ、倒れ伏す。政府軍は「任務完了だ」「何も殺すことはなかったのではないか・・・？」などと言いながら去っていく。出血はそこまで酷くはなかったが、左頬には、乱戦の中で明人が放った雷の流れ弾がつけた横一閃の傷があった。
「ぐ・・・はぁッ・・・明人・・・無事、か・・・」
「バ、カ、言ってんじゃ、ないよ・・・無事どころの、話じゃ、な

いっての・・・」
明らかに致命傷であるとは誰が見てもわかる。そんな傷を負っても、明人は未だ明るくいようとしている。
―死ぬ。誰が見ても辿り着く結論はそれだけであった。
「ぐ・・・は・・・」
気付けば雪が降り出していた。流れ出す血で紅く染まる雪。何とか立ち上がり、相棒の元へと駆け寄る。
「明人・・・明人しっかりしろ！」
「な・・・なあ兄ちゃん・・・オレ、もう、ダメかも・・・」
「下らないことを言うなッ・・・！！お前は・・・！俺みたいに剣客になるんじゃなかったのか！？」
「だって・・・よ・・・。心臓、やられちまってるんだぜ・・・？いくら、治癒道使っても・・・どうしようもねーんだよ・・・」
微かに笑い、明人は右手を―小太刀を握ったままの手を剣心の左頬にあてがう。
「やっ・・・ぱ、あったけぇや、兄ちゃんは・・・」
「御免兄ちゃん・・・此処で・・・オレ、死んじまうけどよ・・・オレの事、忘れんなよ・・・」
最期の言葉。言い終わらぬうちに手は剣心の頬から滑り落ちた。その際小太刀がずれ、もう一本、今度は縦に大きく傷をつけた。
「明人・・・明人死ぬなッ・・・！！まだお前は・・・！！生きなければならない・・・目を覚ませェェッ！！」
呼びかけても応えることはなく。ただ無情に時間のみが過ぎていく。安らかな顔で死んでいった明人は、雪の所為で冷たくなってしまっていたが、ただ唯一、その右手だけは何時までも温もりを失わなかった―。

回想終了―。
「以来・・・お前の心には雪が降り続けている。あの時の雪が、あの時の冷たさのまま、あの時の悲しみを抱いたまま・・・」

心悟はゆっくりと踵を返した。
「お前が悔いていようがいまいが、そんなことは俺には関係ない。関係ないしどうだっていいことだ。けどな、今も苦しみ続け、もがき続けている弟を黙って放っておくほど俺は非情な訳じゃねえ。お前があの娘を護りたいんだったら・・・。あの娘を悲しませたくないんだったら、俺は何時でも修行再開に応じてやる」
「・・・兄者、俺は心の何処かで、なのは殿を明人に重ねてしまっていたのか・・・？」
その問いかけに、心悟は応えない。だが代わりに短く微笑った。
「そいつぁ誰にも分からねぇ。その答えはお前自身の心にある。知りたけりゃ、自分に聞いてみるしかねぇ。でも、今はそんな事どうだっていい。・・・付いて来い！！今から御剣流の奥義！そして御剣に伝わる『極み』の技！お前に伝授してやる！！」
力強く言い放つ心悟。それに呼応するように、剣心も顔を上げた。
「ああ・・・！！やろう、兄者！！」
「それでこそだ・・・それでこそ俺の弟だ！！行くぞ剣心！」
御剣の兄弟龍が今ここに、新たな絆で結ばれた。緋村抜刀斎ではなく、緋村剣心でもない裸の剣心。心の奥底に眠りし志が甦る時、彼らは最強と呼ばれた二人に還る・・・。

「っと・・・。何か忘れてるような気がするんだが」
「あ・・・なのは殿」
いざ修行とまで進んだ二人だが、何かを忘れていることに気がつく。見ればほぼ完璧に無視されていたなのはが部屋の片隅でいじけている。床に呪詛なんか書いている。非常に危ない。
「あー・・・嬢ちゃん済まない」
「なのは殿、済まない」
思い思いの謝り方で何とか許してもらおうとした二人だが、なのはは聞こえていないらしく、大いにずっこける結果となった。二人は半泣きになりながら許しを乞うたのであった。威厳もへったくれも

あったものではない。

第十五閃：抜刀斎の過去（後編）（後書き）

如何でしたでしょうか～？
次回はオリジナル御剣の技が出てきます。約七つくらい。
剣心と共になのはも御剣流の修行を開始！！
その道程はつらいけど・・・頑張ろう。
次回で一旦絆編は終了となります。その代りに「Ｐ・Ｔ＆ａｍｐ；闇の書編」に入ります。なお剣心及びなのはさんそして緋剣商店の面子は闇の書編最後の最後に出てきます。のでご注意を。

お知らせ

えー、どうも納刀斎です。
突然ですが、しばらく連載をストップさせていただきます。
理由は簡単、ホラ、『修学旅行』ってあるじゃないですか、今がちょうどソレの時期なんです。
僕一応は班長（つまりモブ実行委員）なんで、いろいろ大変なわけです。
それでなくとも中学生って大変ですから。
期末もあるんで、おそらく再来週あたりに次話投稿できると思います。
中二のこの時期が一番大切なんだとウチの先生が言ってましたからね。研修旅行のついでに、思いっきり勉強してこようと思います。
誠に勝手ながら、再来週に会いましょう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1300w/

るろうに剣心〜明治剣客浪漫譚〜　明治の剣士と魔法少女の物語

2011年10月21日09時04分発行